
王子と魔女のмасカレイド

runaway

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王子と魔女のマスカレイド

【Nコード】

N0507Z

【作者名】

runaway

【あらすじ】

好奇心で王宮の舞踏会にもぐり込んだ森の魔女イウレース。ちよっぴり見てみたかっただけなのに、王子にバレて捕まってしまい――。まじめで世間知らずな魔女と、陰謀渦巻く王宮で生きる王子の物語。

01・舞踏会

きらめくシャンデリアの明かりの下で、きらびやかに着飾った人々が優雅にダンスを繰り広げている。

生まれて初めて目にする、そして最初で最後であろう王宮の舞踏会。

見たこともない楽器から紡がれる楽の音と、天上人かと思ふ貴婦人たち。

イウレースは忍び込んだ広間の片隅に隠れるようにして、夢のような眺めに目を奪われていた。

——こんな世界が、本当にあるんだ……。

いくつかの偶然と出来心が重なって忍び込んでしまったが、それだけの価値はあった。片田舎の小さな村の呪い師である自分に、こんなものを目にする機会が次にあるとは思えない。

あと少し見たらと思いつつ、どうしても去ることができなかった。イウレースは魔法にかけられたようにひたすら光景に見入り続けた。だからぼうつと見惚れていた彼女は、自分に近づいてきた者の存在にまったく気付かなかった。

「一曲いかがですか」

横合いからかかった声で、イウレースは初めて我に返った。振り向いた先には、一人の男性が彼女に手を差し伸べていた。

「……はい？」

やや赤みのかった金髪にふちどられた際立つた美貌に、湛えられた完璧な微笑がイウレースに向けられていた。一瞬今いる場所も忘れて見惚れてから、鬱金の頭髮にまぎれた額冠が目に入った。

略式ながら間違いようのない意匠が示すところに気付いたイウレースは、ぎよつとして後退った。

今宵の舞踏会の主催者、この王宮の実質的な主がそこにいた。

「え、いえつ、あの……」

病床の王に代わり、ザルカルト王国を預かる王子は、とっさに断るために上げられた娘の手を取って引き寄せた。微笑みを絶やさぬまま、優雅にその甲に唇を触れてからややわらかに言う。

「そう遠慮せずともよろしかろう。今宵は無礼講。みな一夜の夢を等しく愉しもうではないか」

「あ……」

イウレースは彼に連れられて、広間の中央へ歩み出た。ゆるやかなワルツから始まり、曲のテンポは軽快に速まってゆく。王子は流れるような足さばきでステップを踏んで、ろくにダンスを知らぬ彼女を巧みにリードしていく。

導かれるままに廻る景色を眺めながら、イウレースは夢心地にひたった。

音楽の転調に合わせ、彼が娘の身体を引き寄せた。

互いが入れ替わる刹那、涼やかな声が囁いた。

「ニナンの魔女か」

「——！」

はっとイウレースは相手を見た。だが確かめる暇もなく身体が回され、再び引き付けられた耳に声が届く。先ほどのやわらかさを失った、冷たい氷のような声音だった。

「うまく誤魔化していたようだが、残念だったな。そうニーナイ香臭くては、せつかくの術が台無しだぞ」

いつそうめまぐるしくなる曲のテンポに乗せられて、見た目の優雅さはそのままにイウレースはくると弄ばれた。そして時折訪れる交錯のたびに、嘲りに満ちた囁きのみが流し込まれ続ける。

「お前のような老いぼれ魔女まで駆り出されていたとはな」

「間抜けな奴だ。ほかの奴らが捕まっているのを見ていなかったのか」

「向こうもよほど手詰まりと見える」

「しかしあの婆がよく化けたものだ」

「どうした？ もう息が上がったか。年寄りの冷や水はよくないぞ」

曲が終わった。

イウレースは彼の手を振りほどいて離れ、逃げようとした。だが激しいダンスのあとで思うように動かぬ足がもつれて姿勢を崩す。

倒れそうになった身体を、しなやかな腕が支えた。

彼は目を大きく見開いて肩で息をするイウレースを見下ろして、穏やかに微笑んだ。うわべだけの穏やかさ、見せかけの優しさで心配げに言う。

「おお、疲れてしまったか？ これは悪いことをしたな。誰ぞに案内させるゆえ、少し休んでいるがいい」

王子の合図に従って現れた礼服の衛兵二人が、イウレースを両脇から支えた。身動きの取れない娘を見てもう一度、今度は冷ややかな視線を投げかけてうなずき、彼は背を向けた。

衛兵たちはイウレースを挟んだまま丁重に、だが有無を言わず歩き出す。

イウレースは半ば引きずられるようにして、茫然となりながら広間を出て行った。

02・魔女のまやかし（前書き）

暴力的な描写あり

02・魔女のまやかし

そうして夜も更けたころ、イウレースが閉じ込められた塔の小部屋に王子はやってきた。

もう一人、黒い魔法使いの礼装に身を包んだ男が部屋に入って、扉は閉じた。

先ほどまでとはうって変わって冷ややかな表情で、王子はイウレースを見下ろした。

「いつまでそんなまやかしを纏っている。さつさと本性を現わすがいい」

「あ……」

イウレースはうろたえて、応えることもできずただ彼の美貌を見上げた。

王子は苛立ったように背後に立つ男に目をやった。男はうなずき、片手を上げて指を動かしながら何事か呟く。同時にイウレースの周囲の何かが波立った。

無論それが「何か」は彼女にも判っている。

ヴェールのように纏っていた幻のドレスが剥ぎ取られ、中に隠していた毛織の衣服が露わになった。ごわごわした肌触り通りの見た目を取り戻した、実用重視の地味な現実の服に、一瞬己の状況も忘れて嘆息が漏れる。

一方その姿を見た王子は、苦々しげに舌打ちした。

「よばよばの婆のくせに、まだ若さに未練があるか。——いや、いい」

やや驚いた様子で再び唱えかけた男を制し、彼はイウレースを見据えた。

「それほど大切なら構わん。ではその綺麗な貌が傷つけられる前に、大人しく答えるのだな。貴様は何の仕事を依頼された？」

「え……？」

ぼんやりと聴き返した瞬間、頬に鋭い痛みが弾けた。縛り付けられた椅子ごと倒れたイウレースの亜麻色の前髪をつかんで起こし、王子は凄まじい美貌を寄せて言う。

「とぼけるな。ここ二週間ほど、魔法使いがやたらと王宮に忍び込んでくる。おおかたあちらの手引きのためだろうが、貴様は何をする気にいる？ いやそれよりも、奴らはいつ攻めてくる？ 半年後か、一年後か——それとも一月後か。答えろ」

痛みと驚きに朦朧となりながら、イウレースはただ首を振った。何を言われているのか、まったくわけが判らなかった。

だがそんな娘の様子に、彼の瞳は烈しさを増しただけだった。間を置かず反対の頬が張り飛びされる。

「おおよその裏は取ってある。ふざけた態度でいると、ただでは済まんぞ」

さらに二度、三度と繰り返された鋭い平手打ちに口の中が切れ、血の味が広がった。

それでもイウレースが応えることができずにいると、彼はいったん諦めて下がった。腕組みして、うんざりしたように頭を振る。

「わざわざ催した宴にかかったのがこんな小物で、しかもてこずら

せるか。

なんの餌に釣られたのかは知らんが、オークインにさほどの義理があるわけでもなかるう？ 何を強情を張ることがある」

「殿下」

その時、後ろの魔術師が声をかけた。

「この者の術が解けませぬ。まやかし破りも解呪も試しましたが、効かぬ様子」

「なに？」

王子は振り返っていぶかしげに問い返した。

「ニナンの魔女は、魔術にそう長けてはおらなんだと記憶していたが」

「はい、長くニナンの村の呪い師を続けた功で三級魔道士の允許を得ましたが、元来は本草術と占い程度の力しかなかったはずでございます。これは……」

魔術師がうなずく。

「ではニナンの魔女ではないというのか？」

確かにニナイ香の香り以外に、あの婆らしい癖は感じなかったが……」

「ですがほかにそれらしい術者の記録もございません……」

「……婆さまは……先週亡くなったんです……」

弱々しい声に、王子と魔術師は床に転がる相手に目を向けた。イウレースは痛みに涙を滲ませながら、かすれた声で必死に言っ

た。

「私、婆さまじゃ、ありません……」

王子がつかつかと歩み寄った。

かがんで娘を引き起こし、静かな声で問う。

「ニナンの魔女ではない？」

「はい……」

小さくうなずく娘に貌を寄せてのぞき込み、さらに低い声で囁くように言う。

「お前の名は？」

「イウレース……」

王子はしばし娘の瞳を見据えた。

痛みに霞む視界の中で、イウレースは彼のまなざしが心の奥まで入り込んできたのを感じた。与えられた名を手がかりに、彼女の中から必要な情報が引き出されていく。

朦朧とした頭の片隅でイウレースは理解した。

——では彼も、魔道に通じているのだ。

やがて彼は娘を助け起こした。縛めを解き、椅子に座り直させる。表情を変えずに静かに言った。

「嘘ではないようだな」

「はい……」

イウレースはうなずいた。張られた頬が疼き、眩暈がする。

だが彼らの用事はまだ済んでいなかった。求められるままに、痛みを堪えながら訥々と語った。

「私……婆さまに拾われて見習いをしていたんです……。でも、引き継ぐ暇もなく突然亡くなられてしまつて……。それで今日は、登録を変更してもらいに来ていたんです。

そうしたら、舞踏会があるって聞いて……。どうしても見てみたくなつて……」

ほとんど魔が差したようなものだった。

奥田舎の村からはるばる馬車を使い継いで王都まで来たのは、「ニナン村の魔女」として登録されていた育て親の仕事を引き継ぐ手続きのためだった。

そして役所での何げない世間話で、イウレースは聞いたのだ。

今宵、王宮で大きな舞踏会が開かれる、と。

しかも今日は併せて病床長き王陛下の健康を願つて、王宮の大神殿も開放しての一般参詣も行われるということだった。そのため、身なりさえきちんとしていればついでに舞踏会をのぞくこともできるらしい——とも。

村からめつたに出ることもないイウレースは、好奇心をどうしても抑えることができなかった。

それで。

03・提案

「——それで着る物がないからまやかしのドレスを纏って、というわけか」

「はい」

彼女の思考を引き取るように語られた言葉にイウレースはうなずいた。

一度傾けると、頭が疼いて重くてもう持ち上がらなかった。うつむいたまま呟く。

「ちよっぴりのぞいて、帰るつもりだったんです……」

「……引き継いでいらないと言ったな。だがあの術は？」

「普段の占いや呪いに使うものぐらいなら……。でも道具の要るような特別な術はまだ……」

「変更だと？ 抹消ではなく？」

「魔女ではなく、呪い師か薬師で登録し直して、続けるつもりでした……。村には、癒し手がないから……」

全体に嘘ではない。

だが真実すべてではなく、きわどい綱渡りでもあった。

実はイウレースは直接伝授されたわけではないが、育て親の術をほとんど修めていた。その上「ニナンの魔女」と呼ばれた彼女の育て親は、読みもしないくせに書物やら魔道書やらを集めるのがとにかく好きだった。反対に知りたがりの彼女はそれらをすべて読んで頭に納め、ある程度使いこなすこともできた。

だが別にその知識や力で何かしようという欲望は、彼女にはなか

った。また、癒し手のいないあの村を捨てる気にもなれなかった。イウレースはあの村が好きだった。

本を読んだり人を助けたりして、あの場所で穏やかに暮らすのが望みだったのだ。

今までの尋問と、名前を与えた瞬間に垣間見えた王子の底知れぬ力に、イウレースはとっさに悟った。突然の育て親の死に戸惑う、田舎占い師の娘で通すべきだということを。

九割がた嘘ではない。

ただ、自分の望みと身の安全を考えると、残り一割は絶対に知られるべきではない。

顎に手がかかり、顔を上げさせられた。頬に掌が触れて、低い祈りの言葉と同時に潮が引くように疼痛が収まる。

晴れた視界から白い掌が離れていく。代わって見えた王子の表情は穏やかさを取り戻していた。

「我々の勘違いだ。済まなかったな」

言って掌に纏いつく癒しの光の残滓を払い、彼は立ち上がった。

「だが運が悪かったと思って許してほしい。これは必要なことだったのだ」

イウレースは王子の美貌に改めて見惚れながら、ぼんやりとうなずいた。

痛みが引くと、今までの情報が繋がり始めた。

彼らは王宮——ザルカルト王国で暗躍する敵国の間諜や魔法使いの動向に神経を尖らせていたらしい。どうやら今宵の舞踏会も、意図的に警備を緩めて間諜を誘っていたようだ。

そこにあからさまな幻術で服装どころか、どうやら年齢まで偽っている魔女がやってきた。

疑われないほうがおかしかった。

「じゃあ……私、もう……？」

「そうだな——と言いたるところだが」

王子は初めて困ったように言いよんだ。

「私も口を滑らせたな。今の状況が判っているか？」

「オークイン皇国が侵攻を企てている……？」

「そういうことだ」

彼は重々しくうなずいた。

「そして、今のところそれは私と側近数名しか知らない極秘事項だ。下手に外部に漏れると、いろいろとまずいことになる。例えば隣のハイグロウ王国が同調したり、王弟派やら反王政派やらの国内の叛乱分子が呼応して騒ぎを起こしたりと」

「殿下！」

背後の男が咎めるように声をあげる。

王子は軽く手を振って男を黙らせた。イウレースを見ては、肩をすくめて言う。

「つまりここまで知られた、ということだ。悪いがしばらく村に帰すことはできん」

イウレースは小首を傾げた。

仕方がないことは判ったが、それならば自分はどうすればよいのか。

「ここにいれば……いいんでしょうか？」

広間からここまでかなり歩かされた。連れてこられて尋問を待つ間も、人の気配は感じなかった。

閉じ込めておくにはうってつけの、離れにある塔の、その小部屋。

「まあそれがいいのだろうが……」。

人違いでこんなところに監禁するのも哀れではあるな。それにお前もいくらなんでも暇だろう」

王子は苦笑してしばらく空に視線を彷徨わせた。突然娘を見て真顔で問う。

「しばらく侍女でもしてみるか？」

「殿下！」

即座に魔術師が非難の声を上げた。

「仮にも呪い師ですぞ。いかにして外部と連絡を取るやも知れませぬ。それにそのように自由に王宮を歩かせるなぞ——」

「名は奪った。下手な動きをすれば判る」

そっけない王子の返答に、魔術師はいつそう苦々しげに眉を寄せる。

「またそのような軽率を……」

イウレースにも、彼の言葉の意味は判った。

名を聞くだけならばさほどの問題はない。だが王子は先刻イウレースの名を己のものとするために、彼女の中に入ってきた。術者——ここではイウレースだが——の力が強ければ、この時反対に相手を絡め取ることもできる。奪うことは奪われることと紙一重なのだ。イウレースは王子と魔術師を見上げて言った。

「あの、私が軽率だったのだし、差し支えなければここにいます。別に一人でいるのは苦になりませんから」

魔術師はほつとしたようだが、提案を断られた王子はまじまじと見つめ返した。

「ここに？ 生活はどうする。誰か世話に割けと？」

「よろしければ誰かにお願いするか一度戻らせていただくかして、ニーナイ香とジョラムの丸を取って参ります。あの丸のもたらす眠りなら、夢を見ることはありません。」

十日に一度ほど香炉にニーナイ香を足してさえくだされば、終わるまでご迷惑をおかけしないで済むでしょう」

「……ずいぶん高価な眠り姫だな」

「ご存知の通り、ニナンの村はニーナイ香の産地です。腕の足りぬ呪い師も、あの香にだけは困ることはありません」

「……身の危険は」

王子は魔術師を振り返って問うた。

彼と同世代と思われるまだ若い魔術師は、しばし考えるように首を傾げた。やや置いて主にうなずきを返す。

「悪しき毒ではございませぬ。……その方策がよろしいかと」「そうか」

王子は呟いてから娘を見て言った。

「お前がそれでよいと言うのなら、終わるまで寝ているがいい。
このスーデイルムが同行するゆえ、今から行って必要なものを取
ってこい」

言い終えると彼は踵を返し、部屋を出て行った。

石段を下る足音が遠ざかってから、魔術師が静かに言った。

「跳べるか」

イウレースは無言で首を横に振った。

魔術師は立ち上がった娘の手を取り、空いている手で印を切った。
低い詠唱に続き、二人の姿はかき消えた。

04・森の塔

夜更けの森は静まり返っていた。

イウレースは木戸を開けて闇に包まれた庭を突っ切り、塔の鍵を開けた。

石造りの小さな塔は田舎の呪い女にしては上等な住処だが、元はと言えばどこかで名を成し世を捨てた隠者が魔法使いの住処であつたらしかった。彼女の育て親がこの地に來た時には所有者は絶えて久しく、村から少し外れた山すその森に住みつこうなどと考える者もいなかったらしい。

イウレースは彼女の育て親から、この打ち捨てられた塔をいかに片付けて居心地のよい空間に仕立て上げたかを、幾度も聞かされたものだ。

闇を手探りしてランプに火を灯し、イウレースはさっそく棚から必要なものを探し始めた。

ニーナイ香はすぐに見つかったが、ジヨラムの丸薬は切らしていることが判った。急いで必要な薬草をかき集めてすり鉢に放り込む。

背後で青白い光が広がる。魔術師が杖の先に明かりを灯して室内に踏み込んできた。影を切り取ったような黒い法衣からのぞく白い肌と、光を弾く白っぽい金髪が浮かび上がる。

イウレースは肩越しに視線を送り、薬草を搗り潰しながら言った。

「すみません。すぐ造りますから」

「ああ」

魔術師は手近な椅子に腰を下ろした。

しばらく黙って娘の作業を眺めていたが、やがて静かに言った。

「本当によいのか」

「……」

イウレースは棚からミロの実を取り出し、鉢に加えた。潰したとたんに漂った独特の刺激臭に目を細めて、小さな声で応える。

「信用しています」

「ふむ」

魔術師は呟く。

——ではこの娘も理解しているのだ。

ジョラムの丸薬は仮死に近い眠りをもたらす魔法薬。

ニーナイの香は一部の魔法効果を強化、持続させる特殊な効能を持つ。

どちらも確かに身体を損なう毒ではない。

だが問題なのは「眠りを操る」という事柄自体の危険性だった。例えば醒めぬ浅い眠りは、すなわち醒めぬ夢。永久に続く悪夢に苛まれれば、人の心などひとたまりもない。反対に醒めぬ深い眠りとは言えば、一歩進めばすなわち死にほかならぬ。

くべる香の量によっては夢見ぬ眠りは永久に醒めぬ眠りともなりうる。極端な話、本人は眠っているのだから何をされても判りはない。

そのようなことすべてが、他人の手に委ねられるというのだ。

「私が言えた義理ではないが、なぜ侍女を選ばなかった」

「……王子殿下はご立派なおかたです」

すり潰して調合を終えた材料を水と共に鍋に入れて火にかける。
やがて煮立った鍋から丁寧な灰汁を掬いながら、イウレースは己の
感じたことを考え考え言葉に直して言った。

「ご病気の王陛下に代わり、国を背負っておられます。それなのに、
さしたる力もなさそうな呪い師まで自ら捕まえて尋問なさる。

責務以上のものまで、すべて背負おうとなさっておられるように
感じました」

現王は後宮を好まず、今は亡き王妃との間に子が一人しかできな
かった。そして王が病を得ている今となつては、今後王子が増える
ことはない。

またこの国では王子は代替わりの際に神殿から託宣を授かるまで、
個人としての名前を持たない。継承候補を呪殺などの危険から護る
ためとされる。

つまりあの王子は「リサルヴィア」という王家の一員としての姓
のみを持つ状態だ。

王の病状は思わしくなく、意識は曖昧で譲位の意思を示すことも
できぬといううわさだ。

それは言い換えれば、王子には中途半端な状態で王族の責任だけ
がのしかかっていることになるのではないか。

「殿下を憐れんだと？」

「そんなわけでは……。ただ」

王子の言動の端々に感じた。

責任を果たそうという強い心と、身分にこだわらず示される気遣

い。

「お優しいかたなのだと、思いました。

それでこのようなお忙しい折に、瑣末事で負担を増やしたくはないと思っただんです」

「——そうか」

魔術師は言った。それきり会話が絶える。

やがて液体から灰汁が出なくなっただ頃合を見て、イウレースはゆつくりと歌うように呪文を唱え始めた。紡がれたまじないは薬液に降りかかり、かき混ぜることで染み込んで溶けていく。そして魔法を含んだ液体は、さらに煮詰めることでその効能が凝縮されていく。

充分に煮詰めてから、イウレースは鍋から煮えた液体を皿に取り、冷まして小瓶に詰めた。本来はもっと水分を飛ばして練って丸薬にするのだが、このまま飲み薬にしても効果が変わるわけではない。驚くべき苦味とこの世のものとも思えぬえぐみさえ気にしなければではあるが。

ニーナイ香と小瓶を袋に入れ、各部屋をまわって最低限片付けてから魔術師を見る。

「できました」

「ああ」

魔術師は立ち上がった。

だがそのまま娘のほうには行かず、歩いていって階段脇の石壁を杖で叩いた。

するとぐぐもった音とともに幻の石壁が揺らめき、代わりに木戸が現れた。掲げられた杖の明かりに照らされて、隠し部屋の棚に並

ぶ本の背表紙が陰影を作った。

魔術師は杖を一巡りして書物の背を追っていった。やがて木戸を閉めて再び表面を叩くと、元通りの石壁が現れる。

目を見開いて固まった娘を見やり、魔術師は静かに言った。

「まあ、よかろう。お前の心に免じて殿下には黙っておこう」
「……」

イウレースは深々と頭を下げた。

05・目覚め（前書き）

残酷な描写あり

05・目覚め

深い、深い闇。

どこまでも落ち込む、無明の世界。

その闇の池に、突然波紋が広がった。

細波を立てながら闇が薄まり、沈んでいた意識が浮き上がっていく。

透明な広がり、光が差し込んだ——と思ったところで泡が弾けた。

うつすらと目を開いた先に見えたのは。

二顆の青玉と、サファイア貌をふちどる鬱金の滝。

「馬鹿者が」

耳に落ちてきた音に反応して、イウレースはぼんやりと目をしばたいた。深い眠りから起きた者の常として思考が働かず、状況が理解できない。

やがてようやく目の前の男性の貌と、眠りに墜ちていた己の記憶が繋がった。

「……王子殿下」

「スーデイルムと二人でたばかったな。危険な真似を」

王子は苦々しげに言うといウレースから離れた。

扉のある側の壁に寄って耳をそばだてる。何かを聴き取って舌打ちし、厳しい声で呟いた。

「ちつ。来たか」

「……あの……？」

眠る前の王子の言葉が思い出される。「終わるまで寝ているがい」と彼は言った。

目覚めたということは、状況が一段落したのではないか。

身を起こしながら彼のほうを見ていると、王子は音を立てぬよう注意深く扉に門をかけて戻ってきた。声を低めてイウレースに囁く。

「今は待て。

撒けなかったようだ。遣り過ごせなければここに来る」

「え……？」

イウレースの戸惑いの声の余韻が消えぬうちに、扉の向こうで石床を叩く音が聞こえてきた。いくつもの足音が近づき——そのまま通り過ぎていく。

だが連れてこられたときのイウレースの記憶によれば、ここは王宮の外れのさらに奥まった一角だった。恐らくこの先は行き止まりのはずだ。

いったんは去った足音は、さしたる間を置かず再び戻ってきた。音が、止む。

王子は動きを止めて息を潜めていたが、足音が扉の前で止まった瞬間に鋭い声で囁いた。

「下がって隠れている」

同時に扉を叩いたり蹴ったりする激しい音が響く。王子は抜剣し

ながら戸口に進み出た。

衝撃が加わることに、みるみる扉が内側にたわんでいく。

そしてついにひしゃげた門が弾け飛び、頑丈な木の扉が破られた。

躍り込んできた人影が、王子の剣の一閃で血飛沫を撒き散らしながら崩れ落ちる。

続けて扉から侵入しようとする敵を、鋭く牽制して押し戻した。

王子はその後扉の狭さを巧みに利用して一度に相手にする数を制限し、二人三人と敵を屠っていった。

だが茫然と見るイウレースの前で幾人目かが斃れたところには、明らかに動きが鈍り始めた。

よく見れば、ずっと敵に正対しているはずの王子の衣服は背中側が裂けて血で染まっている。

「——国内の叛乱分子が呼応して騒ぎを起こしたり——」以前聞いた彼の言葉がよみがえった。不意を突かれ、とりあえず逃げてきたのだろうか。

イウレースは精神を集中しながら空に指を滑らせた。

然るべき言葉を唱え、喚び起こしたイメージを魔法に織り込み凝縮して解き放つ。

轟音と共に、部屋と廊下を区切る地点に炎の渦が出現した。

「——！！」

戦っていた王子と敵は、とつさにそれぞれ炎の範囲から跳び退る。イウレースは壁を離れた。見られないよう扉の正面を避けて壁伝いに走って、轟炎の渦巻く戸口に向かう。引き戻そうとする王子に、早口で小さく囁く。

「体を、早く」

言いながらイウレースは自ら倒れる刺客を引つ張って、部屋の内側に引き込んだ。焼け焦げ一つない体を見た王子は、すぐに覺つて死体を炎の当たる部分から退けた。

向こうから見えない壁際に寄ってから王子は娘に囁いた。

「幻か」

イウレースはうなずいた。

人を引き摺るという行為は、非力な女の身には荷が勝った。息を切らしながら言う。

「向こう側には、熱も、少し……。でも、時間稼ぎぐらいにしか」
「その時間が重要だ。逃げる途中でスーデイルムらには知らせた。衛兵もそろそろ来るだろう」

王子の言葉にイウレースはほっとして息を吐いた。
いくら熱くとも、しょせんはまやかしだ。覺悟を決めてほんの一步踏み込むだけで本物の魔法の炎でないことなどばれるだろう。そして王子を狙うなどという輩が、そう長く躊躇してくれるとも思えない。

少し余裕のできたイウレースは改めて王子を見た。まだ油断なく剣を握り、娘を背にかばう位置で扉のほうを注視している。
恐る恐る声をかけた。

「お怪我を……？」
「かすり傷だ」

イウレースの声にわずかに首を捻って視線を送った王子は、どうということもないように応えた。扉に向き直ってからふと苦笑を含んだ声音で続ける。

「だが確かに、治す暇はなかったな。しかも、焦って味方にも判りにくい方角に逃げてしまったようだ」

炎の向こうで喧騒が広がった。

怒号が飛び交い、剣戟と逃げ去る足音と追う足音が交錯する。片方が圧倒的な勢いでもう片方を呑み込んだ。

やがて幻の炎が切り裂かれ、黒い人影が飛び込んできた。

「殿下！」

「大事無い」

焦りをにじませた宮廷魔術師の声にうなずきを返し、王子は剣を収めて歩み出た。

「敵は？」

「ほぼ全員捕らえるか殺すかいたしました」

応えてから魔術師は安堵のため息をついた。

「よくぞご無事で」

「いささか危なかったな。まさかあれが裏切るとは。完全に不意を突かれた」

王子はうなずいてから低く呟き、己に癒しを施した。落ち着いた声で問う。

「それで、出所は」

「恐らくは王弟派ではないかと。無論証拠はございませぬが、あの者を懐柔できた上で、ここまで短絡的な手に訴えるとなると。まず間違いないでしょう」

魔術師は累々たる刺客の屍を見やって、感情を抑えた平板な声で語った。

聞いた王子は眉を寄せて呟く。

「……愚かな。戦も始まらぬうちに首を締めるか」

「焦ったのでしょ。戦が始まれば、総指揮を殿下が執られるのは必定。その上でもし勝利したとなれば、継承権で劣る王弟殿下にはいつそう厳しい状況になりましょうから」

「なるほどな。」

——それはそうと」

突然冷やかな目つきになって、王子は魔術師を見た。

「私をたばかったな。危険はないなどと言って」

06・ではそのように

「私をたばかったな。危険はないなどと言って」

魔術師は唐突な話題転換に動じるふうもなく、壁際で立ち尽くす娘をちらりと見やった。何食わぬ顔で応える。

「定められた用法を守れば、そう危険ではありませんが」

「そうかもしれんな。お前がつきつきりで管理して、くべる香に一つまみの間違いもなくやりとげればな」

王子は冷たくやり返した。

少ない数の暗殺者に追われて、人気のないこの離れに逃げてきたのは偶然もいいところだった。身を隠すためにとっさに滑り込んだ小部屋に入って初めて、王子はここがニナンの魔女の跡継ぎが眠る部屋であることを知った。

きつく焚かれた眠りを導く香に包まれて、娘は血の気のない顔で横たわっていた。

触れた蒼白い頬は死人と紛う冷たさ。

尋常ならぬ、危険なまでに深い眠りであることは容易に知れた。

「だがお前が任務を帯びて城を離れたらどうなる？　あとを任された者が、面倒を厭うて一掴み香炉に入れたら？」

「殿下は瑣末なことまでお気になされすぎます。少しは我らをご信頼くださいませ」

「そういう問題ではない」

なだめるような魔術師の言葉に、王子はむっとしたように言った。

「やはりこんなやりかたは間違いだ。侍女として召す」
「ご随意に。その方策でよろしいでしょう」

王子はまじまじと宮廷魔術師を見た。

「お前、前と言うことが変わっていないか」
「まだ一週間も経っておりませぬ。それなのに、何もせぬうちに犯してもいない過ちで咎められたのですぞ。割に合いませぬ」

魔術師はすまして言った。

表情をあらためて刺客を示しながら語る。

「それに陛下が病床に就かれてこのかた、様子見に徹していた王弟派までこうして短慮を起こしました。眠らせて情報を秘匿する理由はもはやございますまい。」

今度こそオークイン皇国に利用されぬとも限りませぬゆえ、この者を帰すわけにはまいりませぬ。ですが、下級幻術とて魔法を使える者が城中にいるのも有益な様子」

「私の護衛をさせると？ この者を疑っていたのはお前だろう」
「護衛とまでは申しませぬが。それにどのみち名を握っておられると存じましたが？」

イウレースは茫然と二人のやりとりを眺めていた。

あまりにもきわどい内容だ。

王族間の権力闘争の内幕などというものは、無関係な部外者が耳にしてよいものとは思えなかった。前回は抑制の効いていた宮廷魔術師さえ、かなり迂闊なことを口走っているようだった。

淡い期待を抱きかけていたイウレースも、気付かざるを得なかつ

た。

——結局、彼らは娘を当面城から出してくれる気はないらしい——

王子が娘の様子を見て取り、唇の端を歪めた。

娘が自分たちの意図を汲み取っていることに、彼もまた気付いている。そんな表情だ。

イウレースは情けない気分になって目を伏せる。

「まあよい、スーデイルム。お前の口の軽さからして、信用できると判断したのだろう。

然るべき仕事を与えておけ」

「御意」

頭を下げた魔術師と娘を置いて、王子は廊下へ歩み出た。控えていた衛兵隊長の報告を受けながら、その足音が遠ざかっていく。

魔術師が顔を上げてイウレースに目を向けた。

「さて、何か希望はあるか」

イウレースは困り果てた表情で首を傾げた。

いきなり希望を問われても、そもそも王宮でどんな仕事があつて自分に何ができるのかもよく判らない。

とりあえず思いついたことを口にした。

「あまり……おそばには……」

あまりに正直な「希望」に、魔術師が苦笑する。

「ほう。珍しい応えだな。殿下のそば仕えは競争率が高いというに」
「私は市井の粗忽な呪い師です。あまりからかうのはおやめください」

嫌そうに言うと、魔術師は揶揄するように片眉を上げる。

「呪い師にしては御大層な術だったぞ。私が来るまで、味方も誰一人踏み込めなんだ」

戸口だけで燃えさかる炎。

魔法の業火がまやかしてしかありえなかったが、近付けば紛うかたなき熱波が襲ってくる。

魔術師が駆けつけたとき、王子の近衛たちさえも二の足を踏んでいた。

「どちらも大した術ではありません。呪い師なら誰でも使います」

本当のことだ。

まじないや占いを生業にするような市井の術師にとって、ちょっとした演出のための幻術は必須なのだ。騙すと言ってしまえばそれまでだが、うまく使えば迷信深い村人の気持ちを後押しすることもできる。

それにまやかしとごまかしは魔女——もつと言えば女の専売特許でもある。

「確かにな。だが組み合わせで同時に発現させたのではないか」

王立の魔術学院で学んだ正式な術師に違いない宮廷魔術師は容赦なく指摘した。言葉に詰まった娘を見て、軽く嘆息して言った。

「殿下は鋭いぞ。あとで平和な暮らしに戻る気でののなら、いま少し気を付けるのだな」

イウレースははつと魔術師を見た。魔術師はほんの一瞬穏やかに微笑んでから、無表情に戻って言う。

「殿下に顔を合わせずに済ませたいというのなら……侍女ではなく使用人——まあ下女だな。厨房や掃除といったところか。ただ、きついぞ」

イウレースは微笑んだ。

「田舎育ちの世間知らずの魔女としては、侍女として粗相のないように過ごすほうがつらいでしょうね」

「そうか。ではそのように。来るがいい」

二人は惨劇の部屋を後にした。

07・平穏な日々

「今日は西の離宮の大回廊の掃除だって」

「ええー。あそこ柱ごとに彫刻あるじゃない。あれ全部磨くの？」

「しょうがないでしょ。まあイウレースには嬉しいんでしょうけど」

「ほんと、変わってるよね。あんなの見て何が面白いの……」

「あ、あの」

「判ってるわよ。好きなんですよ」

「侍女とかだったら、室内のすつごいお宝も見れるんだろうけどねえ」

「あの、別に……」

「まあ、あの回廊もおつきなタペストリーとかあるから、あんたはきつと楽しいわよ。でも手は休めないでね。さ、行こ」

それからの数週間は、イウレースにとっては忙しくも平穏な日々だった。

日の出と共に起き、こまねずみのように働いて寝る。楽ではなかったが、一国の王城だ。身なりは清潔に保てたし、食事も豪華ではないが充分だった。

宮廷魔術師が連れてきたということで最初は警戒されたが、「あこがれの舞踏会をこっそりのぞこうとしたが、身なりの悪さで捕まった」という決して嘘ではない事情を説明すると、みな同情を示してくれた。

もともと真面目な性格で雑用には慣れていることもあり、すんなり溶け込むことができた。

掃除で城内を巡ることはあっても、それらの仕事は基本的に貴人たちの目に付かない時間帯に行うべきものだ。王族はもちろん貴族

を目にする機会は少ない。

ニナンの村では見ることもない建築様式に華麗なタペストリーや調度の数々、そして名工の手による芸術品を毎日眺めて、ときには触れることもできる――。

どちらかと言えば、イウレースは幸せでさえあった。

だが伏兵は思わぬところから現れた。

この王宮では、適材適所の名目で配置変えが行われていた。自薦他薦を問わず申請があれば、適性を審査した上で問題なしとなれば職場を変更できた。

王の病が悪化して政務を任された王子が実験的に取り入れた方針で、貴族や大臣からの反発を受けながら手探りで実施されているという話であった。

もちろん階級が上の者の一声で簡単に覆るし、そう頻繁に変わるというものでもない。また身元の不確かな者が入り込む危険も当然ながら存在する。

だが一方で厩番が並々ならぬ腕を持つ料理人であることが判ったり、兵士が熱烈な希望の末に素晴らしい演奏家になったりと、利点も多かった。

なににせよ、一度決まった配置が絶対のものではなかったのである。

かつて宮廷魔術師がイウレースに「殿下のそば仕えは競争率が高い」と言っていたのは、つまりそういうことだった。

もちろんイウレース自身は現状にたいそう満足していた。満足しなかったのは、親切で人の好い同僚たちだ。

彼らはすぐに気が付いた。

この新入りは自分たちとは何かが違うということを。

イウレースは彼らにとつては磨くのが面倒なだけの彫像の素晴らしさに見惚れ、考えたことすらない神殿の建築様式に興味を示した。どうやら医療に関して何がしかの知識もあるらしく、怪我をしたり風邪を引いたりすれば城中に生える薬草を見繕ってきて、簡単な手当を施してくれる。

——このような気立てもよく真面目で若い娘が、もう少し上等な服を着て城中を歩いていても不自然ではあるまい。

そう考えて、娘の好奇心をもっと満たしてくれる場所へ押し出そうとしたのだ。

かくして同室の下女から相談を受けた女中頭と、怪我を手当てしてもらった兵士数人と厩番らからの推薦書が担当部署に提出された。そしてイウレースの身柄を預かる保証人であり、王子の補佐官を兼務する宮廷魔術師のもとへ回された。

「……いま少し気を付けろと言わなかったか」

苦笑しながら魔術師は、呼び出した娘に数枚の半紙を差し出した。受け取ってざっと眺めたイウレースは、うるたえた表情で魔術師を見る。

「これ……？」

「うち三通はもう二度目だな。殿下には知らせておらぬが、これ以上握りつぶせば一人二人は私の上に直談判しそうな勢いらしい。つまり殿下にな。そうなれば今度は私がとばっちりをくう。

死にそうなところを助けたと？」

イウレースは書状を繰った。見覚えのある名を見留め、文官の代筆で長々と書かれた文面を読んで激しく首を振る。

「馬に蹴られて壁の金具に刺さったんです。私は薬草で血止めと折れた骨の固定だけして、あとは神殿のかたにお願いしました。どちらかと言えば、助けたのは癒し手の――」

「凄い剣幕だったとか？ 応急手当てが済んでいるからと立ち去ろうとした見習い僧に食ってかかって、遂には神官に術を施させた――と次の書状にある」

慌てて次を見ると、確かにそのようなことが書かれていた。イウレースは所在なげに言った。

「だって、あんな錆びた汚い金具に刺さって……。手当てしてもあのままじゃ危なかったんです。普通はそう……しませんか」

「ほかの者でもそうするだろう。」

だが一般の者は、汚れた金具に刺さったせいで今後傷が悪化する可能性があるなどという理由で、神殿の者を言い負かすことはできないな」

萎れた娘を眺めて再び苦笑して、魔術師は言った。

「とりあえず、下女こしもへから格は上げねばならぬ。希望はあるか」

「……あまり……おそばには……」

前回と同じ質問に対して、イウレースもまた同じ返答しかできなかった。

「それほど嫌か？」

「なんだか……畏ろしいんです」

イウレースはうつむいた。

「敬愛に足るおかたです。でもあまりにも、その——眩し過ぎて」

魔術師は呟いた。

「であろうな」

王子に名を奪われたのならば、彼の内面もまた垣間見たはずだった。

この娘は正常で思慮深い精神の持ち主だ。

彼の王者の器に威圧されてしまったのだろう。

「では、私のところへ来るがいい。書類の整理でもしていればよろう。そんな物が山ほど来るゆえ、この有事の折には手が足りぬ」

魔術師はイウレースが握る半紙の束を示して言った。

「はい……」

「ただ、ここにはごくたまにだが殿下も来られる。見つからぬよう気を付けるのだな」

「はい……？」

そこまで顔も見たくないというほどのことはなかった。それに、多少の関わりはあったが、呪い師がそう珍しい世の中でもない。王子に目を付けられているほど覚えめでたいとも思えなかった。

「目に付けば……いや、いい」

言いかけた言葉をやめ、魔術師は首を振った。
今後の指示を出して娘を下がらせる。

どのみち無駄だということが、魔術師には判っていた。

あの娘は聡明過ぎる。しかも一方で本人の言うように田舎育ちの
世間知らずだった。

願い通り目立たず穏便にことを進めるには、他を欺く術を知らね
ばならぬ。

対する相手は策謀渦巻く宮中で、腹の探り合いにかけては並ぶ者
なき智者。

しかも、智者ではあるが俗世の者でもあった。

「もって二週間ほどか……」

08・書庫

正確には、二週間と三日もった。

イウレースはほとんどの時間を、宮廷魔術師の補助をして過ごしていた。

彼の仕事はかなり忙しく、執務室には常に書類が積み上がっている状態だった。中には宮廷魔術師が担当するものではなさそうな案件まで持ち込まれているようだ。

政治に疎いイウレースはそういうものかとも思いながら手伝っていたが、気付いた魔術師がほろ苦い口調で教えてくれた。

「先月までは有能な担当者がいたのだがな」

聞けばもともと彼はそれなりの家柄の貴族家の出身で、魔術の才がなければ騎士か文官になっていたとのことだった。こういった仕事のいくらかは自ら望んで引き受けてもいるらしい。仕事の合間に語った魔術師は、肩をすくめて締めくくった。

「まあ、よもやここまで増えるとは思わなかったが」

ともあれ最初の数日を書類整理に費やすと、ある程度は落ち着いて余裕もできてきた。

その後は雑用を言いつかったり書庫を片付けたりしつつ、お茶や食事の給仕を手伝いに行くような仕事を中心になった。言ってみれば侍女と官吏の中間のような状態で、忙しくも充実した日々を送ることができた。

ごくたまにという魔術師の言葉通り、王子が訪れたのは一度だけだった。

ある日イウレースがたまった書類の綴りを書庫に納めて戻ってきたら、魔術師の執務室の扉に鬱金の髪が消えるところだった。とりあえず書庫に再び行つて掃除をしてから戻るとすでに王子の姿はなく、宮廷魔術師が嘆息していた。

大臣たちとの会議のあとで、何か相談しに立ち寄ったらしい。だがそれさえも護衛の兵士や宮廷魔術師ら臣下からしてみれば、苦々しいことであるようだった。

この国の王子は、どうやらいささか行動的に過ぎるのだ。

本来は用があれば、臣下の側が王子のもとに出向くのが筋だった。刺客に襲われたのも単独行動時を狙われたことが少なくないのだと、魔術師がぼやいていた。

二週間と三日後。

その神出鬼没さがイウレースにも発揮された。

「なるほど、お前か」

図書室で突然背後から声をかけられ、イウレースはよろよろと運んでいた十冊ほどの綴り冊子を取り落とした。

「あ、あつ」

床にばら撒いた綴りを慌ててかき集めていると、横合いから伸びてきた手が素早く数冊を拾い上げた。

さらに残りの綴りをイウレースから奪って王子は言った。

「どこだ？」

「い、いえっ！ あの、そんな」

「重い。早くしろ」

取り戻そうと焦って手を伸ばす娘ににべもなく言い放つ。イウレースは仕方なく言った。

「奥の書庫に入って三列目の、管理日誌の棚に……」

王子はすたすたと言われた棚に歩いて行って綴りを詰めた。あたふたと後を追ったイウレースを見ると、日誌はきちんと日付通りに並んでいた。王子は娘を振り返って問う。

「まだあるのか？」

「いえ……」

彼はうろたえる娘の様子にふと苦笑した。

「とって喰いはしない。そう怯えるな」

イウレースは恥ずかしくなってうつむく。そしてようやくここに彼がいる理由に思い至った。

「もしかして何かお探しですか……？」

貌を上げて問うと、王子は書庫を見渡し、次いで図書室とつながる扉のほうを見やって応えた。

「戦史が見たいのだが。判るか」

「あ、はい……。書庫の突き当たり右の二段目から六段が戦史です。あと図書室の二階の手前三列に研究文献があります」

「そうか。ではこちらだな」

そのまま一礼して下がろうとしたイウレースを見ずに歩き出す。

「一人では持てん。ついて来い」

歩きながら彼は言った。

「最近スーデイルムの仕事が早いので、誰ぞいい助手でも見つけたかと思っていたが。お前だったか」

「……」

なんとも応えられず、イウレースは黙って彼のあとを歩く。

王子は気にした様子もなく、世間話とでもいうような気楽な調子で続けた。

「城の暮らしは慣れたか？」

「はい……。でも、いろいろ珍しくて」

王子は笑った。

「そうか。まだしばらくは、いてもらわねばならぬようだ。せいぜい学んでいくがいい」

戦史はそれぞれの戦ごとに様々な厚さで並んでいた。王子はざつと眺めて必要な本を抜き出していった。イウレースに幾冊か渡して自分でも五、六冊を抱え、引き返す。

書庫の入り口まで戻ると、扉の前で宮廷魔術師が渋い顔をして立

っていた。

「必要でしたら我らにお申し付けください。護衛たちが捜しており
ましたぞ」

「最近はあると言えば会議ばかり。この状況では遠乗りにも出られ
ぬし鍛錬にも飽きた。全部他人にやらせていては、体が鈍るわ」

王子は平然と言った。

「それより狡いぞ、スーデイルム」

「——は？」

「便利な助手を見つけたようではないか」

王子は後ろで書物を抱えて所在なげに立つ娘を示した。

「お前が最近やたらと早く書類を回してくるから、決済が追いつか
ぬ。半分寄せ」

魔術師は一瞬イウレースを見た。
それで彼女にも判った。

おしまいだ。

「狡いという言われようは心外ですが、無論お望みとあらば。――
半分でよろしいので？」

魔術師は大げさに嘆息して言った。

「構わん。実際お前も忙しかろう。こういう仕事ができる者は重宝
だ。ただのそば仕えなど、ほかの者に任せればよい」

「では週のうち三日は私のところにお寄越してください。四日は殿下のおそばに……」

「それほどは要らん。二日でもいい。一日休みとして、もう一日は図書室にでも置いてやれ」

王子はにやりと笑う。

「ここ二年は誰も触っておらぬはずの戦史の場所まで知っているのだ。読みたい本もあるだろう」

彼は笑って真っ赤になったイウレースから本を取り、両脇に大量に抱えて去って行った。ようやく主君を探し当てた近衛兵の苦言を適当にあしらう声が遠ざかっていく。

魔術師が静かに言った。

「いま少し気を付けると、言っただろう——」

イウレースは悲しげに嘆息した。

09・王子の塔

王子の部屋は城内にいくつかあったが、離れにもさらに一つあると知ったのは三度目の伺候の時だった。

指示を出された場所に向かったイウレースは、見覚えのあるその塔に声をあげそうになった。

最初に捕まった時、連行された塔だった。

あの日は確かに狭い扉をくぐって中に入った記憶があったが、塔の周囲には入り口らしきものがなかった。困つてぐるぐると二周ほど回っていると、突然壁の一部が揺らいで扉が現れた。

恐る恐る中に入り、憶えのある螺旋階段を昇る。

塔の内部も、何か奇妙な雰囲気だった。

窓がなく松明や角灯ランタンのような光源もないのに、階段全体がほんのりと明るい。今回は動転して気付かなかったが、思い返せば二階層ほど昇るまで扉が一つもなかった。

今もかなり歩いたが、ひたすら階段ばかりだった。

三、四階層上がったころ、ようやく扉が現れた。

こもった声がノックに応える。

「開いている。入れ」

王子は傍らの卓に広げた図面に見入ったまま、顔も上げずに言った。

「そちらの机に文箱がある。未決は向かって左だ」

イウレースは言われた通り、持ってきた分厚い書類の束を左端の箱に入れた。

「……本はどういたしますか？」

これには片手が壁の一面を指して応えたので、そちらにあった本棚に立てかける。

室内は整然とはしていたが、様々な物が置かれていた。

王子が今のぞき込んでいるのはどこかの地図らしく、卓にはほかにも同じような大きさの巻物が積み上げられている。本棚には先日持ち出した戦史が並び、それぞれ数箇所には紙片が挟んであった。

部屋の様子をぼんやりと眺めていると、王子が地図から離れて執務机に向かった。箱の縁まであふれた書類を見て低く唸る。

「なんだこれは。」

いくらはかどるからと言って、一気に寄越すことはあるまいに」

悪態をついてから、王子は初めて気が付いたかのようにイウレースを見た。

「おお、悪かったな。重いものを遠くまでご苦労だった」

「いえ……」

「大臣どもがこまごまとうるさくてな。スーデイルムと違って、仕事がちつともはかどらぬ。少なくとも、ここならば邪魔が入らずに済むのだ」

言いながら、卓に着いて今度は凄まじい勢いで書状を繰って決済を始める。

どうすればよいか判らず立ち尽くすイウレースに、王子は手を止めずに言った。

「何か話せ。単純作業ゆえ飽きる」

「え……あの」

イウレースは困って王子を見た。

結局何を話していいか判らず、とりとめもなく尋ねる。

「この塔は殿下の専用なのですか？」

「そうだ。王位に絡む王族と要職の幾人かが、それぞれ専用の塔を持つことができる。」

今は王弟殿下と私のほかは、大神官ゼラー二猊下と宮廷魔術師だな。宮廷魔術師は筆頭のミオベル師が今は半隠遁状態ゆえ弟子であるスーデイルムが使っている。

他人はまず立ち入らぬゆえ、好き放題だ。私やスーデイルムのようにやたらと魔法を施してみたり、大神官のように神との対話のための聖域としてみたり。

亡き妃殿下の塔は、それは豪華だという話だぞ。次の王妃以外は確かめようもあるまいが」

「……殿下は、他人に立ち入られることをお気になさらないのですか……？」

「お前のことか？」

王子は素っ気なく言って次の箱にとりかかった。

「もう、一度入っているだろう」

「……」

取り付く島のないもの言いにイウレースは黙り込んだ。
王子は顔を上げた。少しの間娘を見てから、再び仕事に戻って言う。

「——知っている者は、呼んでもやって来ない。あとで謝ったほうがましだと思っている。」

知らずに来た者の半数は、一周した時点で尻込みする。残りのうち半分は突然扉が出てきたことに驚いて逃げる。それでも入ってきた者のほとんどは、階段を十段と昇らないうちに己の行為を後悔して、出してくれと泣き喚く。

ついたあだ名は“王子殿下の試練の塔”だそうだ。
どうだ？ 試練を乗り越えた勇者としては「

イウレースは、癩癧を起こして喚き出しそうになるのをぐつと堪えた。

己の愚かさにめまいがした。

「試しておられたのですか」

「邪魔は要らぬが、一人ぐらいいは手がほしい。めでたく先着一名の座を射止めたわけだな」

「今ほとんど、とおっしゃられましたか……？」

「内訳を聞きたいなら、塔の中まで入った者はお前で五人目だ。」

スーデイルムとお前を除いた三人は、翌日には城勤めは向かないと言って田舎に帰った」

癩癧の波が過ぎると、今度は泣きたくなってきた。

イウレースは惨めたらしく言った。

「私にも、城勤めは向かないようです……」

「だが田舎には戻れんな。可哀想なことだ」

「それに、ほかのかたとは状況が違います。私は二度めになるわけでしょう」

ここで引き下ると「先着一名」が確定してしまう。「冗談ではなかった。

イウレースはなんとかしようと食い下がった。

「それに、最初の時には塔にも兵士がいたではありませんか」

連行されて、塔の入り口で衛兵から全身鎧姿の兵士に引き継がれた記憶が残っている。機械的なまでに気配を感じさせない抑制された動きで、イウレースを部屋に閉じ込めて出て行った。少なくともあの人物は、宮廷魔術師ではなかった。

「——あれか？」

王子が部屋の一角を示す。

のろのろと追って見た先には、一揃いの甲冑が立たせてあった。兜のみが脇の台座に置かれている。

中身は空洞であることが一目で判った。

「……」

娘の情けなさそうな表情を見て、彼はわずかに苦笑する。

「動かしたいなら兜を乗せるがいい。術が面倒ゆえ、納得してくれ
たほうが助かるが。」

——手がほしいという意味が判ったろう」
「でも……」

「いい加減に認めるがいい。お前は運が悪かったのだ」

王子はきっぱりと言った。

「別に無償で働けとも言っておらぬ。国中の魔術師がどれほど望んでも読めぬような書物が、あの図書室には山ほどあるのだ。

この際あきらめて、勉強でもして帰れ。ニナンの魔女から引き継ぎを受けておらぬというなら、ここで足りぬ分を補っておけばよろう」

イウレースははっとした。

彼の思慮の深さに改めて気付かされ、同時に己の不明が恥ずかしくなる。

「申しわけございません……」

「謝られるほどのことではない。

よし、と」

彼は素っ気なく言った。書類を一まとめにして、イウレースの持ってきた箱に入れた。

娘を見て問う。

「ほかに仕事は？」

「いえ、殿下がございませんのなら」

「そうか。ではこれを大臣府に届けてくれ。そのあとは好きにしていい。

日が暮れたら、葡萄酒を一本と乾酪でもくすねて、またここに来い」

イウレースはうなずいて箱を受け取った。

部屋を出ようとした時、王子が軽い口調で娘の背中に向かって言った。

「お前には、あとで謝る手段は許さぬ。きちんと来るがいい」

10・葡萄酒の罖（前書き）

同意のないR15描写あり。
苦手な方はご注意ください。

10・葡萄酒の罖

今度は塔の前に立つと同時に扉が現れた。

ひたすら階段を昇っていつて辿り着いた扉の奥には、長椅子でくつろぐ王子がいた。飾りけのない軽装に着替え、寝る前といった雰囲気だ。

差し出された盆に玻璃グラスの杯が一脚しかないのを見て取り、彼は苦笑した。

「一人で飲むにはいささか多いな。お前の分は？」

イウレースは首を傾げた。

「いえ、私は……」

「まあいい。座れ」

隣を示されて恐る恐る腰を下ろす。

だが葡萄酒の瓶から栓を抜いて杯に注ぎ始めてすぐ、イウレースは動きを止めた。

「……？」

空気に触れて立ちのぼった葡萄酒の芳香に、微かに別の香りを感じたのだ。

城に来てから知ったものではない。

村の、薬師であり呪い師である自分の家で――。

「どうした？」

のぞき込んできた王子には応えず、イウレースは掌に葡萄酒を落としてすすった。

今までに味わったことのない豊かな妙味と、馥郁たる香気が広がる。

味に異常はない——だがそれが特徴だ。

その奥にほんの微かに、焦し砂糖カラメルを思わせる独特の香り。

続けて耳を弄するような勢いで、心臓が脈打ち始める。

イウレースはどうか息を吸って、囁くように尋ねた。

「殿下は……心臓に持病がありますか」
「いや」

彼は四分の一ほど注がれた杯を取って、中の液体を含んだ。転がすように味を確かめ、すぐに杯に吐き出す。

続けて壁際の棚に並ぶ小瓶から一本を取り、中の丸薬を一粒噛み潰して飲み下した。小瓶を娘に押しやり、皮肉な笑みを浮かべて咳く。

「こんなに摂っては、持病があっても心臓が活発になりすぎるな。もつと少なくすれば、気付かれずに済んだものを。」

——何をしている。お前も早く飲め」

隣で胸を押さえて前のめりにうつむいた娘を抱き寄せ、丸薬を唇に押し込んだ。

歯を食い縛ったまま震える娘の口から、丸薬がこぼれ落ちる。

「——」

彼はすぐさまもう一粒取って噛み砕き、口伝えに与えた。

いったん離れて部屋を去り、階下の部屋から水差しとカップを持って現れる。まだ震えている娘の唇にカップを押し当てるが、ほとんどが顎から喉へ伝ったのを見て取り再び口移しに流し込んだ。

やがてイウレースが詰めていた息を吐いた。

浅い呼吸を繰り返してから、我に返つてのろろと彼の腕から出ようとする。

「申しわけ、あり、ません……」

王子はクッションの位置を動かして娘を深く座らせた。のぞき込んで問う。

「大丈夫か」

「はい……」

イウレースはうなずいてから、卓の瓶を見た。

乾酪^{チーズ}や果物などは厨房ですぐに手配できたが、酒は誰に頼めばいいのか判らず、いろいろな相手に訊いて回ったのだ。

そうしたら夕刻に見覚えのない侍女が話を聞いたと現れて、「極上の樽から用意した」と瓶を手渡された。

宮廷魔術師はあれほど王子を一人にするのを嫌がっていた。

それほど敵が多いのだ。

王子がこの魔法に護られた塔で執務をするのも「大臣がうるさい」というだけではなく、刺客を案じてのことかもしれないかった。

疑うべきだったのだ。

「申しわけありません……」

「別にお前が毒を盛ったわけではなかつた」

王子は杯を指で弾いた。硬く澄んだ音が響く。

「珍しいことでもない。特に戦が近くなると、こういう動きは活発になるな。犠牲になった毒見役もいる。私も多少の訓練は積んでいるが……この量はさすがに危なかった。

それにしてもよく気付いたな」

葡萄酒に仕込まれていたのはギターという毒だった。

ごく少量の乾燥葉を強心剤として利用することもあったが、毒としての効果のほうが有名だ。

特殊な方法で精製したものは無味でほとんど無臭。一つまみが入った杯を干すと、処置が遅ればまず助からない。

この葡萄酒は、一口でこれほどの効果を發揮した。
よほど大量に仕込まれているに違いない。

「婆さまは……魔法より、本草が得意でした……。それにニーナイヤモル口のような香が特に好きで……香りには敏感でしたから」

イウレースは呟くように応えた。

「あまり高価でない毒なら、区別できます……。毒見役をお探しながら……」

「それで毎回倒れるわけか？」

王子は容赦なく指摘した。

娘の肩に手をかけ、引き寄せながら言う。

「お前は今のままで充分に重宝だ」

まだ毒の余韻で朦朧としていたイウレースは、迫ってくる王子の美貌をぼんやりと眺めていた。

彼は微笑って距離を詰め、唇を重ねる。

「——！？」

我に返ったイウレースがびくりと身を震わせた。

「口直しだ」

一度浮いた唇が、触れ合わんばかりの近さで囁いた。再び距離を詰めると、今度は唇を食むようにしてこじ開けてくちづけを深めていった。

広がっていた薬の苦味が、何か妖しい別の感覚に塗り込められていく。

ようやく離れた唇は、そのまま下に滑らされた。先ほどこぼれた水をなぞるように喘ぐ娘の喉もとを下り、鎖骨のくぼみに押し当てられる。

「殿、下——？」

王子の涼しげな笑いを含んだ声が届く。

「本当は酔わせて前後不覚にさせるつもりだったが。まあ似たようなものだな」

「や……！」

力が入らない身体が長椅子から掬い上げられて奥の寝台に運ばれる。

愕然と目を見開いたイウレースを見下ろして、彼はからかうように言った。

「スーデイルムに聞かなかったか？」

私のそばに召し上がるというのは、こういうことだ」

「いやです……！」

「もう遅い。この際諦めて、勉強でもして行け」

起き上がろうとしたが、上からのしかかった身体が動きを封じた。突っ張ろうとした腕が掴まれ、押さえ込まれる。

確かに、もう何もかもが遅かった。

「や、め……——っ！」

ほどなく、稲妻がイウレースを打ち始める。

焼き尽くす灼熱と、

絶望的な甘美さを伴って。

それから長い夜——。

少なくとも後半の記憶は、イウレースには残っていなかった。

翌朝、助手を務めに来るはずの娘は魔術師のもとへ現れなかった。代わりに仕事前といった様子でふらりと現れた彼の主が笑い含みに一言言って去って行った。

「休みだ。恐らく一日動けまい」

魔術師は肩をすくめてから、何_いこともなかったかのように己の仕事に取りかかった。

11・なぐさめ

昼も近くなったころ、弱々しく扉を叩く音に続いて娘が部屋に入ってきた。

ややおぼつかない足取りで歩いて魔術師の前までやって来て、イレースは頭を下げた。

「遅れて……申しわけありません」

「殿下から休むように言われたのだろう。休んでいて構わんぞ」

魔術師は脇の椅子を示して言った。一瞬口にするべきか迷ったが、触れなかったからと言って事実が変わるわけではない。できるだけ淡々と言う。

「……まだ動くのはつらいだろう」

途端に仮面のような娘の貌が苦しげに歪んだ。

「あんな……」

続く言葉をイレースは持たなかった。

彼は優しくかったが、同時に恐ろしいほど容赦なかった。途中で怯えて泣き出した彼女を「大丈夫だ」といたわりつつ、決してやめようとはしなかった。

魔術師は静かに言った。

「殿下は聖人君子ではない。どちらかと言えば英雄だ。そして英雄が色を好むのもまた必定」

宮廷魔術師の言うことはイウレースにも判っていた。

王子は常に自然体にも関わらず、際立った存在感はただ立っているだけで目を引く。まさしく英雄の特質を備えていた。夜会ではやんごとなき美姫たちが炎に誘われる蛾のごとく集まり、自ら吞まれ灼かれることを望む者として少なくない。

もちろんその魅力には、イウレースとて惹きつけられずにはおれぬ。

「……でも、私じゃなくても」

それでも彼女は言ったのだ。いやだと。やめてほしいとも。望む者はいくらでもいる。その者でよいのではないか。

「確かに、別にお前でなくても構わぬだろう。だが昨夜はお前がよかった。それだけだな」

淡々と魔術師は言った。

「そしてこのあとも。毎夜ではあるまいが、お前がよいという夜はあろう」

イウレースは泣きそうな貌になった。

彼女の名は王子の手の中だ。どんなに嫌で本気で抵抗しようとしても、彼が一言名を呼んで命じれば従わざるを得ない。

——もっとも力尽くでも敵うはずがないのだが。

だがそれ以前の問題もあった。

最初の舞踏会のとときと同じだ。

あの美しい王子に求められて、心がぐらつくのを止めることなど

できないのだ……。

「そんな……」

さすがにいささか哀れむような目で魔術師は娘を見た。

この娘は王子のそば仕えを嫌がっていた。

それは恐れからではなく畏れからだ。王子の素質に圧倒されて怯えている。

それに神職にある者ほど厳しい戒律に縛られているわけではないにせよ、一般に善き魔術師は魔術を律するがごとくに己を律することを旨とする。

自覚があるのかどうかは判らないが、この娘の内面は立派な魔術師だ。抗いもできず、相手の思うままに心の箍が外されていくのは、確かにづらい出来事に違いない。

「……殿下は即位までは子をもうけるつもりはないと明言しておられるし、そのための対策も取っておられる」

だがこればかりはどうしようもなかった。

慰めにならぬと判っていても、彼にはごく現実的な忠告を与えることしかできなかった。

「昨夜は苦しかったかも知れぬが、いずれよくなる。一国の王子の閨房だ。愉しんでおけばよいのではないか」

いつそう惨めな表情でイウレースは嘆息した。

魔術師の言葉はまったく慰めになっていなかった。

昨夜もつ、それは判っていた。

判るまで教え込まれたのだから。

そのとき、昼を告げる鐘が鳴った。

昼はほかの侍女と共に給仕をせねばならない。イウレースは魔術師に頭を下げ、仕事へと去っていった。

魔術師は眺めるともなく娘の後姿を見送った。

ほっそりとした身体と白くなめらかな肌。今はきっちり編まれているが、ほどけば流れ落ちる絹糸のような亜麻色の髪と、森の樹木が長年かけて育んだ琥珀の色をした瞳。

確かに、大輪の花のように華やかな容姿というわけではない。

だが理知的なまなざしと穏やかなやわらかさを感じさせるたたずまいには、目を素通りさせぬ静かな魅力があった。

最初の夜に魔法の眠りに墜ちた娘を見たとき、魔術師すら目を奪われた。

王子がああ、の舞踏会の夜、怒りに任せて手荒に扱ったのも仕方がない。

よりによって好みの娘と思った者が、幻を纏った魔女だったのだから。

「毎夜では、あるまいが……」

それから二月ほど経って――。

開戦の気運が高まり、城中が活気付いてきたある日。

イウレースは考えた末に、宮廷魔術師にあの夜の出来事を報告することにした。

その前夜、再び王子の寝酒に毒が仕込まれたのだ。

今度は王子自身が気付いた。

しかも気付いた理由が、酒瓶からニ―ナイ香が微かに匂ったからというのだから皮肉もいいところである。使われた毒自体も、毒性は強いが苦味が強く、一口含めば違和感を覚えるような代物だった。

運んだ侍女がその場で捕らえられたものの、「亜麻色の髪の王子の侍女」に渡されたと繰り返し返すばかりで要領を得なかった。調べた魔術師によれば、相当強力な暗示をかけられたようだという。

結局彼女も利用されただけで、毒の出所は突き止められなかった。イウレースも取調べを受けることになったが、当の王子は気にする様子もなく鼻で笑った。

「お前まで目障りになってきたというところか。失敗続きで手詰まりになってきたと見える」

彼はイウレースの名を奪い、支配下に置いている。

その気になれば娘が裏切ったかどうか調べるのはたやすいはずだが、特に確かめる気もなさそうだった。

「ここしばらくニ―ナイ香など触っているまい。前の夜とてお前の肌からそんな匂いはしなかった」

「……」

理由はともかく、信用はされているらしい。

最初の一件は王子には「窮屈になるからよせ」と口止めされていたが、やはりイウレースは情勢を知らなさ過ぎる。

再び同じようなことが起きれば、今度は取り返しのつかないことになるかもしれない。

魔術師の冷静な判断を仰ぐためにも、報告したほうがよいと思ったのだ。

イウレースはその日の仕事を終えた夜、与えられた部屋に下がる前に宮廷魔術師を訪ねた。

「——葡萄酒に毒？」

話を聞くなり、魔術師は厳しい表情になって問い返した。

12・要請

「――葡萄酒に毒？」

王子の補佐も勤める魔術師は、かなり疲れた様子だった。日常業務に加えて前日の毒殺騒ぎの事後処理に一日中追われていたのだ。それでもイウレースから二ヶ月前にも似たようなことがあったと打ち明けられると、彼はとたんに表情を引き締めた。さらに件の葡萄酒を直接手渡されたと聞いて身を乗り出す。

「顔は憶えているか」

「侍女の服装でしたが、見たことのないかたでした……」

「何か特徴は」

「髪は被り物で隠れていたので判りません。背が高く……あと」

イウレースは口ごもった。魔術師に目で促され、言いにくそうに言う。

「今思うと、少し……有無を言わせない感じというか」

「高圧的？」

「はい、そんな雰囲気……――あ」

辿った記憶から相手の姿が浮かび上がる。

瓶を手渡されるときに袖口にのぞいた、侍女には不釣り合いな黄金の煌き――。

「綺麗な腕輪をしていました。三重くらいに巻いた金色の蛇が口に紅玉をくわえて……」

魔術師は舌打ちした。

「メーキュの魔女だ。やり口が姑息だとは思ってたが、あの女狐め」

イウレースの存在を思い出し、苦々しげに説明する。

「王弟殿下の愛妾の魔女だ。毒や黒魔術の類を得意とする」

「愛妾の……魔女？」

「なかなかの美人だっただろう。王弟殿下もあちらの道が好きだからな。そういうことだ」

イウレースは弱々しく微笑んだ。

「では私と同じかたなのですね」

最初「週のうち二日」と言われていた伺候は、あの夜を境に二日と二晩となり、その後も夜だけが着実に増えていった。特にここ二週間は、何ごともなく寝れた日は半分をようやく上回るかどうかといったところだ。

魔術師は苦笑した。

「そう卑下するな。あの魔女は自ら望んで王弟殿下に近寄ったと聞くぞ。

それともお前も、殿下に取り入って王宮で享樂と榮華を極めたいのか？」

「……」

イウレースは蒼くなって首を振った。

その様子を眺めていた魔術師が、突然真顔になって言った。

「——イウレース。お前、従軍してもらえぬか」

「え？」

「国境付近に不穏な動きがある。オークイン各地から皇都に兵が集結しているとの報が入った。開戦が近い。殿下もそう遠くないうちに出陣されることになるう。一緒に行つて、身边に気を配ってほしい」

思いがけない要請にイウレースは戸惑った。

「私が……ですか？」

戦となれば、王子の周囲には鍛錬を積んだ精鋭たちが護衛につくはずだった。

イウレースのような非力で体力もない女性の身にできることがあるとは思えない。

「無論殿下自身も注意深く鋭いかただ。大抵は独力で切り抜けられる。普段ことさら単独で動かれているのも、何かお考えがあつて刺客を誘つておられるのだらう。

とは言え実際に襲われれば、殿下が傷つくこともあるのだ。お前も知つての通り」

魔術師は低い声で語った。

「鋼の刃ならば衛兵が防ぐことができよう。だが毒や魔術はそうも行かぬ。私とて気をつけてはいるが、到底足りぬ。何より手駒が足りぬのだ」

苦悩の皺が魔術師の額に刻まれた。

「殿下にはもともと私を含め腹心が五人いた。だが私を除く四人とほかの信頼できる臣下のがなりが、傷つくか害されるか、そして裏切るかしておそばを離れた」

イウレースは息を呑んだ。

「そんなに……？」

「証拠はないが、少なくとも半分は王弟殿下の手の者だろう。あのかたは王位が欲しくてたまらないらしい。しょせん手段を選ばぬほうで、ことは有利に運ぶゆえ」

証拠はない、と語る魔術師の口調は苦い。

正直なところ、状況に明らかに王弟の影を感じさせ、ときには物証さえ残っている事件もある。それでも、追い詰めるには足りぬのだ。王弟という高貴なる身分と、地位に付随する人心を惑わすに充分な財力が、詰^{チェック}みの一手を許さない。

「殿下を慕う者は多い。だがこと側近という点においては、あのかたはほとんど孤立無援なのだ」

——それで、とイウレースは納得した。

だから自分はそばに置かれているのだ。最初に名を奪った時、王子に敵意を持つ人物ではないことが判ったから。だから余人の立ち入らぬ塔まで招かれたのだ。

魔術師はイウレースを正面から見た。

「本来なら、戦が始まればお前がここにいねばならぬ理由はない。このような頼みも、筋違いだということは判っている。だが、私は殿下を喪いたくないのだ。あのかたの造る国を見たい。臣下として長くお仕えしたい。」

分別ある善き魔術師と思って頼む。引き受けてもらえぬか」

この上なく真摯な言葉だった。

やがてイウレースは静かにうなずいた。

「私でよければ。微力を尽くします」

「すまぬ」

「殿下は偉大な統治者となられるでしょう。私も、あのかたの治める国に暮らしたい」

一寸置いて付け足す。

「あまりおそばではないところで、ですが」

「……まだ嫌か」

「私は結局、魔女ですから。夜の闇の中で薬を煮詰めて、部屋の暗がりに潜むような生活が似合っているんですよ。あのかたは、太陽なんです。土竜には直視も能わぬ、天の金剛石——」

イウレースは目を細める。

涼しげでいて時に射竦めるようなまなざしも、

優しいが威厳に満ちた優雅な微笑みも、

燃えるような夜の営みも——。

すべてが眩し過ぎた。

「おそばにいと、吞まれて、灼き尽くされてしまいそうなんです。遠くの穴蔵で、焦がれながら畏れているのがちょうどいいんです」
「そうか……」

魔術師は呟いた。

その時、涼しげな思念が二人の間に落ちた。

——イウレース。

「――」

呼ばわれた娘は悲しげに目を閉じた。

ここ二週間で均せば半分ほど休めてはいたが、日に日に部屋に帰れる夜は減ってきていた。実のところ、昨夜は三日ぶりの「休み」だったのだ。

しかも連日の会議で苛立っているのか、貪るような激しさで求められる。

一度「お疲れでしたらお休みになられたほうが」と忠告したら、肉食獣のような微笑みが応えて、気を失うまで無茶苦茶にされた。

「まさか、戦場では……その、ありませんよね」

恐る恐る訊くと、魔術師は片眉を上げた。

「各軍の長以上の天幕は独立しているゆえ、なんとも言えんな。少なくとも湯浴み程度はお前の仕事になろう。」

ちなみに王弟殿下はお気に入りを幾人が引き連れていくようだぞ」

「……」

娘は心底悲しげに嘆息した。だがそれに関して何か言う前に、やや苛立った思念が再び響く。

イウレースは慌てて頭を下げ、部屋を辞していった。

一月後。
戦争が、
始まった。

13・戦争（前書き）

残酷な描写あり

13・戦争

戦端を開いたのは、オークイン皇国だった。

皇国軍は払暁にいきなり国境の砦からあふれ出た。

緩衝地帯を駆け抜けて、大兵力を以ってザルカルト側の砦を易々と飲み干す。

彼らの勢いは砦の制圧で止まらなかった。

最初の村を焼き討ちして奪い、拠点にする心積もりだった。

そして国境の村を一気呵成に落とさんとした皇国軍は、だが村の手前で待ち構えたザルカルト軍に迎え撃たれることとなった。

両軍の正面衝突により、川がせき止められるように皇国軍の勢いが殺される。

オークインが得ていた情報によれば、ザルカルトは国王が倒れて以来の混乱が尾を引き統制が取れず、進軍も遅れがちのことだった。

充分に先手を取れるはずだったのだ。
なのに。

思いがけぬ展開に皇国軍兵は浮き足立った。その混乱から回復せぬうちに、側面からもザルカルト軍が襲いかかる。

速度を重視した皇国軍の隊列は伸びきっていた。
そこを衝かれて後方部隊と分断されて叩かれては、ひとたまりもなかった。

あとは一方的な展開となった。

多くの皇国の兵が殺され、或いは囚われた。

すべては王子の作戦だった。

丹念に間諜を洗い出し、偽の情報を山ほど流したザルカルートの情報操作に、皇国は見事に惑わされたのだ。

王子は先に攻め込ませることで皇国に不当な侵略を受けたことを国の内外に示し、一方でそれ以上国土を踏みにじらせるつもりはないことを明らかにしたのである。

こうして皇国軍は村を占拠することなく撤退した。

だが続く報せは勝利の美酒に酔いかけた王国軍を動揺させる。

払暁の一撃を仕掛けてきた皇国軍は、王国にとっても予想以上の規模だった。にも関わらず砦の後方に、オークインはまだ相当の兵力を残しているとの報告が斥候部隊からもたらされたのだ。

出鼻を派手にくじいたこの戦いによって、ようやく互角になったというところらしい。

ところが報告を聞いた王子は、すかさず敗走する皇国軍の追撃を命じた。一度は奪われた砦を取り戻すべく檄を飛ばし、自ら先陣を切って戦いに挑む。

今後も厳しい戦いが予想されたが、今このときの流れはザルカルートに傾いている。

ならば流れがあるうちに、さらに勝利を確かなものにすればよい。

結局この日、戦線は国境の砦まで押し戻された。両軍は緩衝地帯を挟んで対峙することとなった。

鬱金の髪をなびかせて青毛の馬で戦場を駆ける王子の姿は、まさに戦神さなからであった。

勝利に湧く王国軍の士気はより高まっていた。

栄光のその陰に、粘りつくように黒く禍々しい嫉妬もまた集めながら――。

イウレースは走る馬の背に必死にしがみついていた。

彼女にあてがわれたのは、栗毛の小柄な去勢馬だ。大人しくて扱いやすい馬だったが、それでも一人で乗れるようになるまでにはかなり練習しなければならなかった。従軍を承諾してから毎日練習して通常の行軍速度ならばどうにか遅れないでついて行けるようになった。

王子はそもそも娘の従軍に反対したが、宮廷魔術師が押し切って承知させた。

ならば後方の支援部隊と共に馬車で来ればいいと言われて、それでも馬を選んだのはイウレース自身だ。

戦争が始まれば宮廷魔術師は魔法使いや神官たちを率いねばならず、王子のそばに付くことができない。代わりになるうはずもないが、決めた以上はできる限りのことはしたかった。

そして今、イウレースは駆けていた。

王子が襲われた戦場へ。

その日、王子は前線を激励して、護衛の一隊と共に本隊へ戻ろうとしていた。

戦争が始まって、しばらく経ったある日のことだ。

両軍の最初の衝突のあとは小競り合いが続き、戦線は膠着状態に陥っていた。

次の一手を求めたにらみ合いと忍耐の日々が続く中、下がりがちな士気を鼓舞した帰りに、その出来事は起きたのである。

樹木が生い茂る薄暗い森を抜ける途中、イウレースはかすかな魔力のうねりを感じた。

薄く薄く張り巡らされた魔法の緞帳^{カーテン}が、揺らめいて消えていく感触。

「……殿下！」

「伏勢だ！ 皆の者、気を——！」

同じく気付いた王子が警告の叫びを発するのとほぼ同時に、鋼の矢が降り注いだ。馬を狙った攻撃に、半数近い馬が倒れるか掉立ちになり幾人もの騎士が振り落とされる。

間を置かず木陰から護衛に数倍する数の人影が湧き出るように現れた。威圧するような関の声をあげ、混乱する部隊に突進してくる。

王子はイウレースの馬が無事なのを見て取り、すぐさまその馬の尻を叩いて叫んだ。

「イウレース！ 逃げて知らせろ！」

去勢馬が走り出した方角を見定め、王子自らは反対方向に馬ごと突っ込む。

立ち塞がった敵を蹄で蹴り倒しながら進むと、彼めがけてさらなる刺客が群がってきた。

「……完全にしてやられたな」

王子は呟き、剣を抜いた。

向かってくる敵は多く、このまま馬に乗っけては押し包まれて身動きが取れなくなるのは明らかだった。王子は馬から跳び降りざまに勢いを乗せて、手近な相手に剣を打ち下ろした。

唐竹割りにされた敵が血を撒き散らして斃れる。返り血を吸った鬱金の髪が、異様な艶を帯びた。

王子の剣が翻って次の敵に向けて振り抜かれる。

魔法を帯びた剣は人ひとり両断してもくもり一つない。冴え冴えとした光が尾を引き、次の敵の胴を薙ぎ払った。自分に向かって倒れてきた死体を蹴り飛ばして新たな敵への盾として、その隙に隣の刺客の首を刎ねる。

やがて味方の騎士たちも混乱から立ち直り、王子を護らんと駆けつけてきた。

「だが我が命——安くあがなえると思うなよ」

王子は獰猛な笑みを浮かべた。

血なまぐさい剣戟と怒号が周囲を満たした――。

どうにか制御を取り戻してすぐ、イウレースは馬首を反転させた。

王子の命令が自分を逃がすための方便なのは判りきっていた。

本隊まではまだ遠く、助けを呼べる距離ではない。

何ができるかも判らなかったが、とにかく現場へ戻るためにできる限り馬を走らせた。

そして、ようやく辿り着いて、見たのは――。

まさに目の前で最後の相手と刺し違え、

累々たる屍の間に崩れ落ちる、

彼女の主の姿、だった。

14 去る者

「殿下！ 王子殿下——！」

イウレースは血を吸った大地に沈む王子の身体を抱き起こした。

生温かい血が背中に触れた掌を濡らし、地に伝い落ちていく。痛みと出血に朦朧とした様子の王子は、呼びかけた娘をつつろに見上げただけだった。

イウレースはぞっとした。

彼の瞳には濁った死の翳が拡がり、膜をかけるように覆われつつあった。

宮廷魔術師にはすでに魔法で知らせは送ってある。

だが娘にはこの地の土地勘がなく、正確な場所を伝えることまではできなかった。いくら腕が良い術者でも、座標が把握できなければ簡単には転移して来ることはできない。

しかもここは木々が生い茂る森林だ。あやふやな位置情報で樹木という障害物に重ならないように実体化するのは、実質不可能である。

宮廷魔術師や癒し手たちが駆けつけてくるのはまだ先だ。

なのに、彼の命は掌に掬った砂が零れるがごとく肉体から流れ落ちかけているのだ。

——助からない。

恐怖と共に避け得ない事実がイウレースを打つ。

彼女は癒し手ではない。

彼女にこの怪我を癒す術はなかった。

——癒す、術は。

迷っている暇はなかった。イウレースは王子に顔を寄せ、囁いた。

「私の名は？」

うつろなまなざしは動かぬ。

イウレースは彼の頭を抱いて、いっそう鋭く囁く。

「殿下。私の、名を呼んで。判るでしょう？」

王子がぼんやりと目の前の顔を見た。

反応を捉えたイウレースは彼の視線をしっかりと絡め取り、渾身の力を込めて烈しく言う。

「私の、名を、呼んで！」

「……イ……ウレ……ス……」

ひび割れた唇からかすれた言葉の連なりが漏れた。

イウレースは弱々しい言霊を手繰り寄せ、己の裡に取り込んだ。紡いだまじないの最後の綾糸として組み込み、術を織り上げる。

二人の周囲に自然ならざる気配が渦巻く。

起こった変化を確認して、娘は目をきつく瞑った。

同時に凄まじい痛みが肩を灼いた。イウレースは低く悲鳴を漏らしてうずくまる。

痛みの中で必死に魔術師に呼びかけ続けながら、娘の意識は遠のいていった。

目を開くと、イウレースは固い寝台の上に寝かされていた。起き上がろうとした瞬間、ねじれた肩から激痛が疾った。

「っ……！」

堪えながらゆっくりと身を起こす。

そこは、怪我人の並ぶ医療用の天幕の中だった。寝台に腰掛けたまま痛みの波に耐えていると、黒い法衣を纏った魔術師が患者を縫って歩み寄ってきた。

「大丈夫か」

「……はい」

見上げようとすると再び痛みが疾った。慎重に上を向き、魔術師の顔を視野に収める。

まず問ったのは、最も尊い命。

「殿下は？」

「取り留められた。いささか血を失いすぎたゆえ眠っておられるが、もはや危機は脱した。今従軍した神官が全員で付き添い、回復と護衛を行っている」

言ってから魔術師はぐるりと天幕を見渡す。癒し手である中位以上の神官の姿は少なく、治療師や見習い僧、手当の心得のある者などが怪我人たちを看ていた。

「お陰でこちらには魔法の使い手はあまり回せぬが。仕方あるまい」
そう、仕方のないことだ。

そんなことはどうでもよかった。イウレースは安堵の息をついた。

「よかった……」

「……何があつたのだ？ お前までがそのような怪我を」

「待ち伏せです。護衛と少人数で移動していたところを、狙われて……」

イウレースは唇を噛んだ。

「多分、魔法で身を隠していたのでしよう。誰も気付けませんでした。本当は、私が気付かなきゃならなかったのに……」

「己を責めるな。それにお前が知らせてくれたからこそ、殿下は助かれたのだ」

「あの怪我も、私を庇われたせいです。護衛が戦っている間に馬で逃げればよかったのに、残って戦われて、最後にあんな怪我を……」

「……殿下は冷静なおかただ。勝算ありと踏まれて残られたはず」
「でも！」

激しく首を振ったとたん、痛みが突き抜けた。低くうめいてうつ

むくと、魔術師がいたわるように怪我のない肩に触れた。

「私、お護りしなければならなかったのに、反対にあんなことを」

イウレースはうつむいたまま言った。

痛みにか、昂ぶりにか、声が震える。

「このままではご迷惑をおかけするだけです。それに、あんな、恐ろしいこと……私にはもう無理です。もう、許してください……！」

「イウレース……」

「お願いです……！」

イウレースは縮こまるようにして頭を下げた。

「殿下を心の底より敬愛しております。だからこそ、おそばにはいられません。私の気持ちをお汲みください……！」

魔術師は瞑目した。痛々しいほどの沈黙ののち、遂に貌を上げる。

「誰ぞ、癒し手と呼ばへ」

命じられた兵士が、やがて疲れた顔をした神官を一人連れてくる。魔術師に話を聞いた神官はうなずき、娘に術を施した。

一礼して再び持ち場へ去っていった癒し手を見送ってから、彼はイウレースに屈み込んだ。涙で潤んだ娘の瞳を見て、優しく言う。

「今までご苦労だった。帰還する負傷兵らと共に戻って、己の家に帰るがいい。殿下には私から言っておこう」

イウレースは目を逸らした。

「申しわけ、ありません……」

「気にすることはない。お前には、本当に世話になった」

魔術師は立ち上がった。

「達者でな」

もう一度娘の肩に軽く触れてから、踵を返して去っていった。

「……」

イウレースは彼の背に向かって頭を下げた。

目を伏せ、深く息を吐く。

——願い通りことを進めるには、他を欺く術も知らねばならぬ。

半年に満たぬ間ではあったが、確かに変わった。
もう、以前と同じではない。

イウレースは目を開いて立ち上がった。

天幕を出て、そして戦場をあとにした。

15・業を負う者

目覚めた王子は、すぐさま宮廷魔術師を呼び寄せた。
駆けつけた魔術師に冷静な声で問う。

「戦況は」

「膠着状態は変わりませぬが、やや有利に展開しております」

魔術師は即答した。

「奇襲した者どもは全滅しましたゆえ、殿下が襲われたことは最低限の者しか知りませぬ。我が軍の士気に影響はなく、反対に打開策のない相手側がいささか焦れているようです」

「そうか。——どれほど寝ていた」

「五日ほど。危ないところでしたが、癒し手が間に合いました。
——それより殿下」

淡々としていた魔術師の声が硬くなる。

「王弟殿下が戦死なさいました」

寝台に座していた王子が腰を浮かす。

「なんだと？」

にわかには信じ難い話だった。

「どういうことだ。あのかたは最後尾の温存部隊だったはずだぞ。
先走ったとでも？」

王弟が率いていたのは予備軍だ。戦況厳しいときは切り札としてあるいは有利な戦いにおいては詰めの一手として機能するはずの一軍だった。消極的な温存はしないと王弟とも約しており、実際に先日の初戦でも側面攻撃や追撃で大きな戦果を上げている。言ってみれば一番美味しい位置を任せていたのである。よほどのことがなければ、王弟本人が傷つくことはないはずだった。

魔術師は硬い声で続ける。

「先走ったと言えば、先走ったのでしょ^うな。
……殿下を襲った者たちの中に、一人だけ真銀の鎧ミスリルの者がおりましたでしょ^う」

王子はうなずき——そして同時に苦しげに眉を寄せた。

「……そうか」

ほの白く輝く真銀の鎧と、揃いの意匠の魔法剣を手にした者——。それは彼の左肩を貫いた相手であり、また最後に一騎打ちで仕留めた者であった。

「遺体は保持の術を施して天幕に安置しております。いかがなさいますか」

「……どうしようもあるまい。敵陣に自ら勇敢に斬り込み名誉の戦死を遂げられたとして、その天幕を臨時の廟としておけ」

不自然なほどに平板な魔術師の言葉に、王子もまた抑揚のない声で応えた。

だが少しして、つらそうな、乾いた笑みを浮かべて呟く。

「まったく、次から次へと……。最後は王族殺しか。また大罪を犯させてくれたものだ」

「おやめください。大罪を犯したのはあちらです」

苦々しげに魔術師は吐き捨てた。今までの所業も許しがたかったが、今回の件は情けをかける一片の余地も見出せなかった。

「味方で味方を襲い、しかも親族を手につけようとするなぞ」
「過ぎてしまったものは仕方あるまい」

王子は名状しがたい表情を浮かべた。
憤懣やるかたない様子の魔術師を反対に宥めるように言って、力なく寝台に腰を落とす。深い嘆息と共に言葉を吐き出した。

「では、我が護衛たちも助からなんだか」

それは確認だった。

目の前で次々と斃し斃されていく者たち一人一人の最期は、王子の目に焼きついていった。

完全な奇襲を受け、しかもあれだけの戦力差がありながら、彼の護衛たちは自らの任務を果たしたのだ。——己の命と引き換えに。

目に浮かんだ激戦の記憶を辿るうち、王子はふともう一人自分に付き従った者の存在を思い出した。

顔を上げて問う。

「イウレースは？」

「手傷を負いましたが、助かっております。ですが」

魔術師は目を伏せた。

「暇を乞われました。この任は荷が重過ぎると。戦場は恐ろしいと……受理いたしました。もはやこの地にはおりませぬ」
「そうか……仕方あるまいな」

王子は呟いた。

彼を狙った奇襲部隊は、魔法で気配を隠されていた。

攻撃が始まるまさにその直前まで、まったく気配を感じなかった。

王弟が首謀者であつたのなら、気付けなかったことにも納得が行く。

王子と——実力は知られていないにせよ——イウレースという二人の術者がいることを知った上で、隠蔽やら魔法封じやらの高度な術が幾重にも惜しみなく使われていたに違いなかった。また襲撃の場所が森というのも救出を阻む転移封じの意図だろう。

王弟本人が出てきたことから考え併せても、王子を確実に抹殺するために準備万端に練り上げた周到な罠だったはずだ。

だがイウレースにしてみれば、説得を振り切つてついて来たにも関わらず己の役目が果たせなかったことになる。

加えて、あれほどまでに生々しく凄惨な戦いの現場を目にしては、田舎で平和な暮らしを送ってきた娘が怯えるのも無理はなかった。

「世話になつた礼ぐらいは言っておきたかつたが」

怪我をしていたというのは少し意外だったが、生きているのならばとりあえずはいい。

今までそばに引き止めていた理由も、気に入っていたという勝手なものだ。

「それにしても、あの身体を抱けなくなるのはいささか残念だな」
「九死に一生を得てのお言葉とは思えませぬ。それに、そのようなことを聞けば何もなくともイウレースは逃げますぞ」

冗談めかして魔術師が応じる。軽口を叩く主の様子に安堵したように、強張っていた表情がわずかに和らいだ。

王子は一つ嘆息して寝台に身体を倒した。

「まだ本調子ではないな。二刻ほど休む。
そのあと作戦会議を行うゆえ、各隊の長を集める。——片をつける」

「御意」

魔術師は一礼し、護衛の神官兵を呼び戻して天幕を去った。

「……」

一人になった王子は、斬り付けられた己の肩をそつと押さえた。

回復魔法で傷は塞がれたが、この傷は深い業を彼に負わせた。

だが、彼にはまだすべきことがある。
どのような業も、彼は背負って進まねばならぬ。立ち止まることは許されないのだ。

苦悩を噛み締めるように瞑目し、彼は必要な力を蓄えるために眠りに落ちた。

16・葡萄酒より紅く

宮廷魔術師は主に呼び出され、回廊を歩んでいた。

柱廊の合間から見える空はどんよりと暗く、吹き込む雨が外に面した石床を塗らしていた。

オークインとの戦争が終わって、半年が経つ。季節の変わり目の長雨に加え、昼過ぎから風が強まってきていた。夜は嵐になることだろう。

「入れ」

目的の一室に辿り着いて扉を叩くと返事があつた。

伺候した宮廷魔術師を見て、王子は手にしていた額縁を無造作に放り出した。

「御用で？」

「少し付き合え」

問うた魔術師に彼は執務机に肘をついた手に顎を乗せ、つまらなさそうに言った。もう片方の手で傍らの卓を示す。

「仕事が片付くのは結構だが、この天気では手が空いても何もできん」

卓には杯が二つと酒肴が置かれていた。

魔術師はそちらに歩き出しかけ、ふと王子の執務机の端に積み上げられた額縁の山に目を留める。

すべて女性の姿絵だ。

「見合いですか」

「最近また増えた」

王子はうんざりした様子で、二十枚近くはあろうかという額縁の山を見た。

「大臣もうるさくなってきた。スーディリム、お前のほうから何か言ってもらえんか」

魔術師は冷ややかに言った。

「殿下、あなたももうよい年です。陛下のご容態も思わしくない。私としても、こればかりは大臣らの味方です」

実際、不思議なところではあった。

多くの夜を侍女や貴婦人たちと寝所を共に過ごすわりに、この王子は特定の相手を定めなかった。気に入った相手を幾夜も続けて召すことはあったが、正室や側室に迎えようとはしない。

正室にはある程度の政略や格式が絡むにしても、女たちには側室を望む者も幾人もいた。だが王子がその求めに応じることはなく、目下のところ臣下たちの悩みの種だった。

「時機を待てと言っているのだ」

王子は鼻を鳴らした。

席を立て卓に移動し、どっかりと腰を下ろす。

「みな時機はとうに訪れていると思っておりますよ」

葡萄酒を杯に注ぎながら魔術師は言った。

まずは自分で一口すすって味を確かめ、それから主の杯を満たす。

「よい葡萄酒ですな」

「故王弟殿下の秘蔵の樽だ。不味かろうはずがない」

凱旋帰国ののち、戦死した王弟の葬儀は盛大に営まれた。

宮廷魔術師ら事実を知る者の中には、卑怯な手段に出た王弟を英霊として祀ることに反対する者もいた。だが襲われた王子自身が頑として譲らず、名誉ある死として王家の墓に入れられたのである。

その後、城内の王弟派は駆逐された。

メーキュの魔女をはじめとする愛妾たちも王宮を去った。可能な者は故郷に帰らせ、拒む者や行き場のない者は恩賞や遠くの地に屋敷を与えるなどして整理された。

散発的に他国から刺客が送られてくることもある。

だが多少傷つけられたこともあったものの、王子の周囲はおおむね平穏と言ってよかった。年内には崩御するであろう国王の継承者として、国民の人気も高く臣下の信任も厚い。

足りぬとすれば、独り身ということぐらいなのだった。

「イウレースなどどうです。気に入っておられたのでは？」

魔術師がふと思い出したように言った。

任を解いて行かせてしまってから、魔術師はあの娘に給金と呼べるものを何も与えていないことに気がついた。

とりあえずニナンの村にある魔女の住居に幾ばくかの金貨と宝石

を届けさせた。

すると後日丁寧な礼状が届き、それであの娘との交流は途切れた。

王子は肩をすくめて提案を一蹴した。

「大臣どもが許すものか。」

——それに、案外しっかりした娘だ。身を固めているかも知れんぞ」

「さて……」

彼がその気になれば、大臣の反対など鼻で笑って一蹴するに違いないはずだが。

思ったことを口に出せず曖昧に返事をした魔術師に、突然王子は杯を置いて言った。

「ところで、イウレースは怪我をしていたと言ったな。重い怪我だったか」

「——は？ あ、はい……」

魔術師は首を傾げた。

「一番大きかったのは肩でした。恐らく剣か槍で貫かれたのでしょう。かなりの深手でした。」

癒しの術は施させましたが、殿下の治療に集中して神官らも疲弊しておりましたので……完全には治らなんでしょうな。今はさすがにもう塞がっているでしょうが。——何か？」

「いや」

王子は椅子によりかかり足を組んだ。

「イウレースは非戦闘員だ。

私とてあの戦闘中、それなりの心遣いはしていたつもりだったが」
「……ええ」

魔術師は呟く。

その「それなりの心遣い」こそが彼女を苦しめた。

だが言っても仕方のないことだった。感慨を押し込め、事務的な口調で応える。

「ですがあの状況では。かなりの乱戦だったように見えたが」
「うむ……」

話が一旦途切れた。

二人はどちらともなく酒盃を傾け、やがて魔術師が別の話題を切り出した。

その後しばらくとりとめもなく語り合うつち、夕刻を知らせる鐘が鳴った。

魔術師は立ち上がって一礼し、己の業務に戻っていった。

「――」

王子は座ったまま玻璃の杯を揺らした。

血のように鮮やかな紅い液体は、ある記憶を呼び覚ました。

——そう、この葡萄酒だった。

娘を最初に抱いた時の、ギタリの毒入りの葡萄酒は。

娘の愛らしさと悲壮なまでのけなげさが思い出され、唇が微かに緩む。

魔術師の言う通り、確かに気に入っていた。

それだけに腑に落ちなかった。

あの戦闘で、王弟の部隊が狙っていたのは王子のみだった。

それが判つてすぐイウレースに逃げるよう命じ、彼自身は反対のほうへ戦場を誘導した。護衛たちは王子を護ろうとして斃れていったのだ。

何より、彼は娘が襲われているところを見ていなかった。

最後に王弟と相討ちになる寸前、真つ青な顔で立ち竦む姿を見た気がする。あの時点で外傷らしきものはなかった。

そのあとに襲われたというのなら、まだ敵が残っていたことになる。

しかしそれはあり得ない。

だとすれば自分は確実に止めを刺されていただろうし、暗殺部隊の精鋭にイウレースが立ち向かって勝てるとは到底思えない。しかも肩を貫かれるなどという深手を負って――。

「肩か……」

呟いた刹那、とうに癒えたはずの傷が疼いた。己の左肩を見やる。

――勝負は、相討ちだった。

あのとき、自分は相手の首を刎ねたが、王弟の真銀の剣もまた彼の左肩――限りなく心の臓に近い辺りを鎧ごと貫き通した。痛みよりも灼熱の塊が弾け、致命傷であることを感じながら意識が墜ちていった。

目覚めた時、命があることをまず意外に思ったものだ。

あの娘は彼のように修練を積んだ戦士ではない。「肩を貫かれた」と魔術師は語った。同じ傷を受けたのだとしたら、さぞかし辛い思いをしたことだろう――。

そのとき、彼の動きが止まった。

同じ、傷。

「肩だと……？」

逃げろと言った。

なのに、彼女は戻ってきた。

生き残れる状況ではなかった。

なのに、一命を取り留めた。

娘が傷つくはずがない。

なのに、娘は傷ついた。

辻褄が合わない。

なぜ戻った。

どうやって取り留めた。

何があって、いや何をして傷ついた。

「……」

朦朧と霞れた意識の中、娘が何か叫んでいた気がする。

ばらばらの謎絵の欠片があるべき場所に収まり出した。断片的な記憶と状況とが組み合わせられ、違和感という名の空洞を埋めていく。彼の手の中で玻璃の杯がぎり、と軋んだ。

「そういう、ことが……！」

次の瞬間、杯は澄んだ音を立てて砕け散った。
破片が掌に食い込み、皮膚が裂ける鋭い痛みが腕から神経を這い登る。

「……………」

彼は掌を見下ろした。

玻璃の欠片が落ち、葡萄酒よりも紅い液体が伝い落ちる。

傷。

込めた力に見合わぬ、

明らかに、浅い――。

王子の瞳に凄まじい激情の炎が燃え上がる。

「あの、女――！！」

17・嵐の夜の訪問

夕食のスープの煮込み具合を見ていたイウレースは、風雨の音に紛れて扉を叩く音に気付いて顔を上げた。

こんな嵐の日の夕暮れに、急患でも出たのだろうか。
とりあえず急いで扉に向かう。

「はい？」

応えたのは、張りのある低い声。

「私だ。――開ける」

「――！」

イウレースは一瞬身を強張らせた。

恐る恐る門を外して扉を開けると、どっと風雨が吹き込んできた。
と共に、人影がすりと滑り込む。

脇に避けて相手を中に入れさせて、イウレースは扉を閉めて振り返った。

彼は濡れてはいたが、ずぶ濡れというほどではなかった。

この場所は「ニナンの魔女の住処」として国に届け出であるし、
宮廷魔術師がイウレースと共に跳んで訪れたこともある。恐らく魔法でやって来たのだろう。

王子は水を滴らせながらイウレースを見据え、淡々と言った。

「久しいな」

「……お久しぶりです」

呟くように応えてから、部屋の奥の暖炉のほうを示す。

疑問はあったが、とりあえず濡れたままで放つてはおけない。

「お風邪を召します。こちらへ」

彼は言われた通り暖炉のそばの椅子に腰を下ろした。感情を読ませぬ瞳が、娘の動きを追う。

イウレースは鍋からスープをよそって卓に置いた。

「どうぞ、温まります」

身体を拭く布を奥から取って来たとき、彼が静かに言った。

「足を痛めたのか？」

「あ……ええ、はい」

軽く足を引きずっていたイウレースは、首を傾げてうなずいた。

「階段でつまづいてしまつて。それより、どうしてこちらに？」

「手はどうかしたのか？」

彼はイウレースの問いを無視した。

娘の左掌には白い布が巻かれていた。

「薬草をまとめていたら、棘が刺さってしまったんです」

イウレースは苦笑しながら、ややぎこちなく左手を振った。

「本当にどじですね。それより――」

「治してやる。見せろ」

王子が手を差し伸べた。

——上を向いた掌には、無数の切り傷。

イウレースの笑みが凍る。

こくり、と喉が上下した。やや置いて、少し掠れた声で言った。

「たいしたこと、ありませんから」

「肩はもういいのか？」

彼は淡々と言った。イウレースの応えを黙殺したまま、問いを重ねていく。一度たりとも視線を外さず。

「え、ええ……」

知らず、イウレースは一步後退った。うわべだけの明るさを取り繕って言う。

「もう、すっかり。——ひょっとして、それで来てくださったんですか」

「そうだ」

王子はゆらり、と立ち上がった。

娘を見る、読み難い瞳。

また一步、娘が後退る。

「ど、どうしたんですか……」
「……判らんか」

彼は昏い声で言った。

おもむろに腰に手挟んでいた短刀を抜き放つ。袖をまくり、刃を己の左の一の腕にあてがった。

「こついうことだ」

縦にさつと刃が疾った。

ざっくり裂かれた白い肌から紅い珠がみるみる盛り上がって零れる。

同時にイウレースが短くうめいて布を取り落とした。

そして左袖に、紅い染みが広がる――。

「ふざけおつて」

地の底から響くような声で王子が言う。

「許さんぞ」

「――」

イウレースは――突然身を翻した。足を引きずりながら奥の階段へと走る。

『イウレース――!!』

王子が吼えた。

凄まじい強制力が娘の魂を縛る。階段の手前でがくりと膝から崩れ落ちたイウレースに王子が歩み寄った。娘に屈み込んで、着衣の襟元に手をかける。

布を引き裂く音と娘の悲鳴が重なった。

「いやあっ！」

露わになった左肩には。

白い肌の滑らかな起伏を断ち切る、
引きつれた赤い傷跡。

——自らの記憶と寸分違わぬ。

「やはり、お前か」

齒の隙間から押し出すように王子は言った。
昂ぶる感情に揺らぐ声で、さらに娘に問う。

「どこまでだ」

イウレースはがたがた震えながら、茫然と激烈な瞳を見返した。

「言え！」

鞭のような鋭い命令に身を竦め、小さな声で応える。

「半分……」

「……半分」

王子が食いしばった齒が軋る音が娘にまで届く。

——確かにそれぐらいの傷痕だ。

怒りの奔流が押し寄せてきて、王子の精神野を圧倒する。

「私が負った傷の半分を、お前が引き受けているというのか」

先刻左手を振った時、動きがぎこちなかった。

当然だ。

生々しい傷跡が示している。この傷は、塞がってはいるが完全には癒えていない。

「やめて！ やめ——！」

彼は泣き叫ぶ娘からさらに衣を剥ぎ取っていった。

かつて疵一つなかった娘の肌には、今や幾つもの傷が刻まれていた。

その一つ一つに、忌々しいほど覚えがあつた。見た記憶ではない。身体が憶えている、痛みの記憶だ。

寢所に忍んだ暗殺者と戦った裂傷、魔法の矢による火傷――。

数日前の剣の稽古で受けた打撲傷を脇腹に見出した瞬間、王子の中でさらに幾本か糸が切れた。

「誰がそんなことを頼んだ！」

王子自身の身体には一つの傷跡も残っていない。怪我を負っても自分で、または多くの癒し手が神の奇蹟を希^{こいねが}って、すぐに痛みごと傷を拭い去る。

一方の娘には医の心得と薬草の知識がある。

だがこれほどの傷を治すのに充分であろうはずもない。

「ふざけるな！」

何をしたかはすでに判っている。

娘はあるとき、彼に名を呼ばせたのだ。

そして支配者である彼が「奪った名を呼ぶ」という行為によって、呪いをかけさせた。

——因果を捻じ曲げ、王子の受けた怪我の半分を娘に転嫁する呪いを。

ゆえに致命傷であつたはずの傷は縮まり、彼は助かった。

「ならば何故去つた！」

同じ怪我を半分に分けたといつても、それは平等な負担ではあり得ない。鍛え抜いた王子と呪い師として育つた娘とでは、基礎体力が違い過ぎる。

その自分が天幕で厚く看病を受け、片やろくな治療も与えられず、兵士たちの天幕の片隅に忘れ去られた。

下手をすれば死んでいたかもしれないのだ。

宮廷魔術師に報告すれば、然るべき処置を受けられたはずだ。なのに娘がしたことと言えば、嘘を並べ立てて呪いもそのままに姿をくらました。

眩暈がするほどの憤りを覚えながら王子は吐き捨てた。

「馬鹿な真似を——」

だがその時、娘が口を開いた。

「殿下が、お気になさることではありません。……私が勝手にやったことです」

18・負け

「殿下が、お気になさることではありません。……私が勝手にやったことです」

「なんだと」

王子の凄まじい形相を、涙の滲む目で見返してイウレースは言った。

「私が勝手にやったことです。あの時殿下のお命が喪われていくのを、見ていることができませんでした。殿下が助かられたと聞いて本当に嬉しかった。」

だから、こうして殿下の形代となることが私の望みです」

王子が憤りのあまり、喘ぐ。

「ふざけるな——」

だがイウレースは彼の目を見て続けた。

「あの時は知らせを送るために、半分しかお引き受けできませんでした。でもこの半年で、結果的にはよかったことが判りました。致命傷でさえなければ、殿下がお亡くなりになることはないのですから」

「やめろ！」

「すべてを背負おうとなさいますな。宮廷魔術師が魔術で殿下をお助けするように、兵士が剣で戦うように、私はこうして殿下にお仕えます。」

玉座は無血では贖えません。

——あの奇襲で、護衛たちは殿下をお護りして死んでいました。同じことです。

私のことはもうお忘れになって、前へお進みください！」

「——」

王子はぎらぎらと輝く瞳で娘を見た。

イウレースは蒼い貌で唇を噛み締め、必死の形相で見返した。沈黙が二人の間に細い糸のように張り詰める。

やがて口を切ったのは王子だった。

「よかるう——」

彼はうなるように囁いた。

「我が痛みを分かち合おうというわけだな」

彼からは相変わらず凄まじいまでの威圧感が滲み出ていた。全身全霊で耐えるイウレースには、応えることはできない。王子は娘の肩をつかんで引き寄せ、さらに間近に見据えて言う。

「私の負けだ。」

ここまで私を怒らせたのは、お前が初めてだ。褒めてやる」

そして彼は突然残りの距離を詰め、顔を寄せて唇を重ねた。茫然とした様子の娘の耳もとで、ひそやかに言った。

「イウレース。お前を娶る」

「——！？」

イウレースがぎよっとして離れようとした。

王子は許さずに娘をきつく抱擁し、煮えたぎった囁きを注ぎ込む。

「怪我なぞ引き受ける必要はない。すべてを背負うと言うのなら、我が荷の半分はお前が背負うがいい！」
「な——」

王子は娘の顔が見えるように離れた。唇を吊り上げ、ぞっとするような微笑みを浮かべる。

「それが望みなのであろう？ イウレース」
「ち、違……」

イウレースはひりつく喉から声を絞り出した。
理由こそ判らないものの、彼がどれほど怒っているか初めて理解したのだ。意志は挫け、おろおろと首を横に振る。

「私……私、間違っていました……お赦しを……」
「なに、間違つてなぞおらぬとも」

王子は冷ややかに囁く。娘を抱いて立ち上がり、室内を見渡した。

「さて、夫婦の契りを結ぼうではないか。寝室はどこだ？ 上か？」
「お赦しを、お赦しください——」
「どこだと言ったぞ？ 『イウレース』」

一言のもとにイウレースの反抗心が根こそぎ刈り取られる。

「二階に……」

意思に反して漏れた言葉を聞いて、王子は階段に向かう。数段昇って音の変化に気付き、足元を見た。

「隠し部屋か。よい家だな？」

のぞき込まれた側は、小さくなってうわ言のように繰り返すだけだった。

「赦して……お赦しを……」

寝室には簡素な木製の寝台が一つ置かれていた。歩み寄って見下ろした王子は、薄茶色くシーツに広がる染みに再び一瞬歯噛みした。

「――」

王子の寝所でシーツが汚れるようなことがあっても、翌日にはまた綺麗に整えられて痕跡も残らない。

だが、本来血染みは落ちにくいものだ。洗って薄くはなっても、完全に消すのは難しい。――傷跡と同じく。

王子は娘の身体を寝台に下ろした。

ずたずたになった布の切れ端を纏っただけの娘は、うずくまって小声で呟き続けた。

「申しわけありません。赦して……」

横たわった娘の右踝が、厚く腫れ上がっている。先刻から足を引きずっていたのはこのせいだった。

——乗った馬が突然暴れ出して、振り落とされたときに踏み潰されたのだ。

後で調べたところ、鞍の下に鋭い石が仕込まれていた。

馬の体重を受けた右足首の骨は粉々に砕けてもおかしくなかったが、幸いそうひどい骨折ではなかった。

尽きることなく湧きあがる憤激を堪えながら、王子は呪文を唱えた。白い癒しの光が拡がり、娘に収束していく。肩の傷が見る間に薄くなり、幾つかの傷は消えていった。

もう一度同じ呪文を唱えると、目に見える傷はなくなった。

イウレースは泣いていた。

うずくまったまましゃくりあげ、赦しを乞い、顔を覆って泣いていた。

「申しわけありません……申しわけ……」

よかれと思ってしたことだった。

あの時点でイウレースにとり得る手段はほかになかったのだ。

彼が望まないことは判っていた。そばで傷を転送されて苦しむ娘を見て、心を痛めるであろうことも想像がついた。

だから彼の心の負担にならないようそばを離れたのである。

だが彼は望まぬどころか、瞋恚の炎を以ってイウレースを打った。娘の行いを全否定し、怒り、なじった。

凄まじい痛みに耐え、怪我が転嫁されるたびに彼の身を案じて、無事に心から安堵していたイウレースの小さな自負と満足は、粉々に打ち砕かれてしまったのだ。

そのあとの彼の行動は、もはや娘には理解できぬ罰にすぎなかった。

「……イウレース」

娘の肩に手がかかる。

ますます縮こまったイウレースを、彼は寝台に腰を下ろして抱き起こした。震える身体を胸の裡に抱き込み、静かな声で言う。

「馬鹿な真似をするな。私が受けた傷は私の業だ。私は王子だが、まだ王ではない。

臣下でもないただの国民であるお前が、命を擲^{なげ}つような仕えかたは望まぬ」

イウレースは涙声で言った。

「でも、私は殿下に生きていてほしかったんです」

耐えられなかった。

あれほど優雅で光り輝く存在が、死の腕に絡め取られて逝ってしまふなどということが。

「みんな……みんな死んでいきました。仕えるかたちが違うだけです。なのに、どうして……」

「……」

イウレースの顔が上向かされる。

怯え、泣き濡れた顔を見下ろす瞳は、深く沈んだ青色をしていた。先ほどのまでの激情は鳴りを潜め、ただ何かを堪えるように微かに眉がひそめられている。

「……お前が、あんな手段に出るとは思わなかったのだ」

しばらくして、彼はふと目を逸らした。

19・もう決めた（前書き）

R15 描写あり

19．もう決めた

「……お前が、あんな手段に出るとは思わなかったのだ」

しばらくして、彼はふと目を逸らした。

「確かにほかの兵士たちとて、我がために死んでいる。

だが、それは国のための死だ。私は国を護るために国王から軍を預かり、兵士たちは自分の生きる国のために戦って死んでいった。

お前のしたことは違う。お前は私のために死のうとした」

「でも……同じです。殿下は、王になられるおかたではないのですか……？ それなら……」

「……だとしても、未だ国王は陛下だ。私は王子だが——王ではない」

どこか苦しい表情で王子は言った。不意に視線を戻し、娘を見る。

「では認めよう。私はお前の名を握り、お前を支配して護っている
と思い込んでいた。そのお前に命を救われ、恩を売り逃げされたの
だ。自尊心が疼かぬわけではない。

あまつさえ半年も経つまで何も気付かず、しかも気付いてみれば
恩を売り続けられている。……許せるはずがあるまい」

イウレースははっとした。

思いもかけぬことだったが、言われてみると判った。

彼は気高く、誇り高い王子だ。その彼が辺境の呪い師に救われ、
依存する——。

矜持が傷つかぬはずがないではないか。

だからあれほど怒ってわざわざ自らやって来たのだ。

己の浅慮に後悔と、申しわけなさがこみ上げてくる。

いくら怒りを受けようと、己の取った手段自体が間違いだったとは今でも思わない。だが少なくとも、何も言わずに去るべきではなかったのではないか。

先刻の、怒りに怯えて漏らしたうわごととは違う、心の底からの謝罪が自然に漏れた。

「申しわけありません……」

「——だが、それだけではない」

うつむきかけたイウレースを止めて王子は続けた。

「あれは致命傷だった。半分に減らして致命傷でなくなる確証なぞどこにもない。

多くの血を失ったとは言え、私は五日眠り続けた。わずかなギタリの毒にあれほど弱かったお前が、あの時死なずに済んだのは、ただの僥倖だ」

瞳に微かに激しい光が揺らめく。

「私はお前を気に入っていたが、それ以上の感情は持っていなかった。常に多くの女を抱き、そういう感情は麻痺させていたゆえ。

……なのにお前が死んでいたかも知れぬと思った瞬間、胃の腑が捻れた。私のために命を削ったと知って、兵士たちが死んでいく時には抱いたことのない感情が湧き上がった」

話に聞き入る娘を抱く腕に力がこもる。

「死なせてなるものか、と。喪いたくない、と。
お前は私が閉ざしておいた扉を開けてしまった。あれほど気に入って毎夜のように抱いていた理由を、私に認識させてしまったのだ」
「――」

イウレースはぼんやりと彼を見上げた。王子は娘を引き寄せ、唇を合わせる。娘の身体を抱きすくめ、貪るようにくちづけた。
離れてから、彼は言った。

「イウレース。お前を娶る」
「そんな――」

イウレースは茫然と呟いた。
我に返って、彼にすがりつく。

「そんなこと、いけません……！」

思いがけないことが続いていたが、これは行き過ぎだった。

「駄目です、殿下。お気の迷いです。私などが――」
「もう決めた」

王子は一言で切り捨てた。
取り付く島のないもの言い、イウレースは激しく首を振って反論する。

「身分が違います。何を言い出されるのです」
「頭の悪い大臣のようなことを言うな。そんなことは関係ない」

たしなめるように言ったあと、彼はふと苦笑した。

「……それほど嫌か」

王子の見下ろす先で、娘は今にも泣き出さんばかりの表情をしていた。

事実、直後には涙を零して泣き出した。

「駄目です……そんなこと、駄目……」
「……」

王子は娘の涙をそつと指で拭った。
イウレースは首を振って彼の手を避ける。

「だって、器が違います。私には眩し過ぎます……」

嗚咽しながら、切れ切れに言う。彼のいかなる言葉にも、もう耳を貸そうとしなかった。

「……イウレース」

やがて彼は嘆息して退いた。

亜麻色の髪に指を埋めて娘の頭を撫でながら、あやすように言った。

「泣くな。別に今すぐにといいわけではない。私にとっても、まだ時機は来ていない。またそのときに話すゆえ、今は終わりとしよう」
「……」

イウレースはのろのろと首を振った。

今は、ではない。

永久に、ここで終わりにすべき話だった。
だが王子もそれ以上は譲歩しなかった。

「それよりも」

と、一方的に話題を打ち切る。

立ち上がって身体を入れ替えると、イウレースを寝台に横たえた。
愉しげな表情を浮かべて、目を見開く娘を見下ろす。

「久しいな。お前を抱くのは」

「な……」

王子は茫然と見上げた娘を押さえつけた。衣の残りを剥ぎ取りながら、淒味のある笑みを見せる。

「や——！」

「言っておくが、私はまだ怒っているのだ。簡単に終わると思うなよ」

「あ……」

暴れて逃れようとした娘に、王子は覆い被さった。

例によって、何もかもがもう手遅れだった。

王子は娘をかき抱いた。

「イウレース」

なんの魔術的な意図もこもってはいない。それでも、その囁きはイウレースの耳に沁みた。彼の声も、くちづけも、蕩けるように心地よかった。

——だがそれは、認めてはならぬ感情だ。

「駄目……」

「……実を言えば、あの戦以降は誰を抱いても、いま一つもの足りなくてな」

弱々しい声を塗り込めるように、今一度やわらかくちづけて王子は言った。苦笑じみた微かな笑みを浮かべる。

「気づいたときはお前が怪我だの痛みだのと一緒に、快樂——感覚まで奪っていたのかと思っただが」

ぼうつとなっていたイウレースは、呆けたような表情で彼を見返した。そして言われたことを理解した瞬間、真っ赤になって首を振る。おろおろと言った。

「ま、まさか、そんなこと……」
「判っている」

娘の反応に彼は破顔した。

「お前が奪ったのは、どうやら別のものだったのだな」
「……？」

意味が判らず首を傾げたイウレースに楽しげに笑いかけ、彼は行動を再開した。

「まあ、今から確かめれば判ることだ」

涼しげな囁き。

「やああ……」

そうして、王子は容赦なく「確かめ」にかかった。

だが一晩がかりで彼が得た確信と結論を――、途中で気絶した哀れなイウレースが耳にすることはなかった。

翌朝、イウレースが目覚めた時には、嵐も去って日は高く昇っていた。

「……」

あまりのけだるさに、何も考える気力がなかった。

「寝坊……しちゃった」

習慣に従ってのろのろと身を起こし、床に足を下ろす。右足の痛みに備えて息を詰めたが――。

骨を伝って突き抜ける痛みはやって来なかった。

「……？――！」

足元を見下ろしてしばらく考え込むうちに、昨夜の記憶が突然よみがえった。

だるさをおして着替え、慌てて部屋を出る。

階下には人の姿はなかった。

やはり倒錯した夢に過ぎなかったのか——とおぼつかなく思ったとき、卓の上にある紙片に気がついた。

そこには流麗な文字で「本を借りる。また来る」と書かれていた。はつと見ると、階段下の隠し部屋の扉が開いている。

視線を戻すと、紙片はただの白い紙に過ぎなかった。

対象の相手が読むと消える——そういう古代の魔法文字だ。田舎の呪い師風情が読めるような文字ではないことを、彼は知っているのだろうか。

「また来る」が、かなり近いうちに実現することが、なんとなく判った。

「ああ……」

けだるさに加えて脱力感がどつと押し寄せてきて、イウレースはへたり込んだ。

20・崩御

宮中の最も奥まった一室。

人払いされたその部屋で、寝台に横たわる者を見守る二つの人影があつた。

寝台のかたわらに座して横たわる者の手を取るのは、法衣に身を包んだ老齡の神官。そのかたわらに立ついま一人は、鬱金の髪をした青年。

「……お隠れになりました」

大神官ゼラーニがゆつくりと宣言して手を離し、聖なるしるしを切る。

黙したまま立ち尽くしていた男は、神の国の一員となった国王に一礼した。永久に力を失ったその手を恭しく取り胸元で組ませる。そうして大きくひとつ息をつき、貌を上げた大神官と視線を交わした。

「……とうとう、か」

彼の低い呟きに、老齡の大神殿の長が目を伏せる。

多くの皺を刻んだ貌にどこか沈痛な色をのぞかせて、ゼラーニは自問するように言った。

「未だに判りませぬ……この路が正しかったのか否か……。やはりあのときお諫めすべきではなかったかと、今でも思わずにはおれぬのです……。それに」

「猊下」

自分よりも遥かに若い青年に向けて、まるで告解でもするかのごとく苦しげに語る大神官を押し留めて彼は首を振った。

「陛下をお止めすることなど誰にもできはしなかったでしょう。」

……それにどのみち、これで流れは正しき路に戻ります。あとは私にお任せください」

彼は立つた大神官に深く一礼して戸口を示した。

年齢以上に一気に老いを深めてしまったような足取りで去った大神官を見送ると、続いてとある名を静かな声で呼んだ。

「お呼びで」

参上した宮廷魔術師は、戸惑いながら部屋の隅に控えた。

室内には主の姿のみで、他の気配はない。寝台に横たわる王からは生命の息吹は感じられぬ。ついに身罷られたのかとの感慨もあったが、一方で人払いされたこの空間に自分ひとりが呼び出される理由も判らなかった。

王子は寝台の傍らの椅子のそばにひっそりと立っていた。

現れた黒衣の魔術師を見るとまっすぐ歩み寄り、
そして――。

跪いた。

「で、殿下――？」

「時は満ちました。今こそお預かりしていた王太子の位をお返しいたします」

彼は澀みなく言った。腰に佩いていた剣を外して床に置き、頭を垂れる。

「今までの御無礼をお赦しになり、我が忠誠をお受けください」

「殿下、何を……」

「私は替え玉でございます」

王子——だった者は貌を上げ、まっすぐ魔術師を見た。

「王太子たる殿下誕生の折、殿下をお護りするためにとある下級貴族家より選ばれました。殿下はお生まれになってすぐに陛下の母君——王妃殿下の血筋の貴族家へ、養子として出されていたのでございます。」

私は陛下が讓位か崩御なさって殿下が王位を継がれるまでの、刺客の目を欺く身代わりとして王子の役目を賜りました。

陛下がお隠れになった今、正統なる王太子にして我が主に位をお返しいたします」

「——」

片膝をつき騎士の礼を取る男を、魔術師はただただ茫然と見る。

あまりに突然のことで衝撃が大きすぎた。

「ですが……ですが、私は殿下に名を捧げて——」

「はい。実はスーデイルムは我が名なのでございます。この役目により廃されましたナスタウ家の、スーデイルム・インチェスと申します。」

そして殿下の御名は、即位に際して神より真名を賜るまで、王族の姓リサルヴィアのみにてございます」

魔術師は混乱した。想像の範囲が届くあらゆる状況を超えていた。

今やスーデイリムの名を取り戻した元王子は言った。

「これより先、殿下の忠実なる臣下としてお仕えいたします」

今やリサルヴィアの王太子となった魔術師は、かすれた声で呟いた。

「臣民が納得するはずがない……」

「血は偽れませぬ。……それに仮に私が王位を得ても我が血筋は続きませぬ」

スーデイリムは淡々と言った。

「役目を定められしとき、断種を施されております。陛下の命により、宮廷魔術師ミオベル師が魔術と薬を用い処置したと聞いております。回復は不可能でしょう」

「――」

魔術師は絶句した。

目の前の男に「相応しい時機が訪れるまで」と相談されて、一時的な対策としての薬を調合していたのは他ならぬ彼だった。

だが一方で王族を増やしたい一部の大臣から、薬を渡すのをやめるか偽薬を渡すよう相談されてもいた。実行こそしなかったが、魔術師自身も彼に身を固めてほしいとその手段を考えないでもなかった。

それがまさか、ただの偽装に過ぎなかったとは。

スーデイリムは皮肉げにうなずいて応える。

「さもなくば、もともと好き者とは言え、あれほど淫蕩の日々を不

注意に送りはいたしませぬよ」

「だが、だが……」

「……」

深まるばかりの魔術師の混乱を見て取ったスーディリムは、深く頭を下げた。

「今まで黙っていたことをなにとぞお許しください。

先ほど忠誠をお受けくださいとは申し上げましたが、お受けになるならぬは殿下の自由。おそばにあるが不快と思し召さば、いかようなる処遇にも従いまする」

「おやめください……！」

ついに耐え切れず、魔術師は自らも膝を折った。スーディリムの肩に手をかけて身を起こさせる。

自製の効いた強い瞳を見て、必死に言った。

「私はあなたの臣下です。そのことを何も疑ったことはございません。

それを今さら、何を言われるのです」

鬱金の髪青年は、陰のあるほのかな笑みを浮かべる。

今まで欺いてきた主を見返して、なだめるように語った。

「疑われぬよう振る舞っていたのです。……ですが、疑われぬはずもない。

王陛下はどちらかと言えば魔道に通じた文治の王でございました。その子息が、魔術を能くするとは言えどちらかと言えば武断の將軍として戦に立つ。王弟殿下があればど躍起になられたのも、何か気付くところがありましたのでしょ。

今こそ、正当な血筋が立たれるときです」

魔術師は呟いた。

「王弟殿下すらご存知でない……？」

21. このようことが

「王弟殿下すらご存知でない……？」

魔術師の呟きに、果たして王子はうなずいた。

「陛下と亡くなられた妃殿下、そして前宮廷魔術師で私を教育したミオベル師、大神官ゼラーニ猊下、あとは陛下の腹心の幾人か——とうかがっております。ナスタウ家と残りの関係者は口を封じられておりますれば」

さらりと語られた内容に、魔術師の口の奥に酸い味が広がる。スーディリムは真摯なまなざしで彼を見て言った。

「あのころは、内憂外憂ともに満ち、国状は不安定であつたと聞いております。それこそ王弟殿下のことも含めて、嫡男が殿下のみという状況では仕方なかつたでしょう。お気に病まれますな」

「私は王の器ではありませんぬ……」

「畏れながら、殿下。私はずっと殿下をおそばで見えておりました。殿下は思慮深く判断力に富み、慈悲深さと果敢さを兼ね備えておられます。必ずや国のあるべき方向へ導いてくださるおかたと存じます」

——違う、と魔術師は叫びたかつた。

それは彼のことではない。

目の前で跪く、この者にこそ相応しい評価のはずだった。

なのに、何故その人物が地面に這いつくばって、相応しくない相手に相応しくない言葉で語るのだ。

「王太子殿下……」

スーデイリムの名を取り戻した者は、苦悩する主君の姿に、これ以上話を続けるべきではないことを知った。魔術師を支えるようにして立ち上がり、一步引いて頭を下げる。

「突然に過ぎましたことをお詫びいたします。私が玉座につくわけには参りませぬゆえ、この場にてお知らせいたしました。

僭越を承知で申しますれば、宰相及び大臣、側近らには早急に知らせ、陛下の葬儀で臣民に広く知らしめ、その流れで即位なさるがよろしいかと存じます」

魔術師は苦悩に満ちた目でつい今しがたまで主だった相手を見た。我が身に降りかかった異常な事態を飲み込むこともできぬうちに、今後のことなど考えられようはずもなかった。

「少し——少し考えさせてください。これでは、あまりに……」

スーデイリムはうなずく。

「それがよろしいかと。陛下はこのような状況も想定なさっておいででした。必要な指示も申しつかっております。

今のところ、崩御は我らのほかは大神官しか存じませぬ。殿下のお考えがまとまるまで、崩御は内密にいたしましょう」

そしてスーデイリムは寝台に歩み寄った。頭を垂れて一礼したのち、低く唱える。

蒼白い燐光が王の身体を包み、吸い込まれるように消えた。戦場で死した王弟に施したのと同じ、遺体の腐敗を止める呪文だ。

「危篤とは知れ渡っておりますが、病床長き陛下のこと。いましばらく生き延びても、不思議はありますまい」

振り返ったスーデイリムは、その貌にゆるく笑みを刻んだ。

「驚かせてしまいましたな。」

「……ですが、私はこれで肩の荷が下りました」

「このようなことが……」

リサルヴィアの王子は眩暈のする頭を押さえながら言った。

「殿——あなたは、これからどうなさるおつもりです」

「敬語は必要ありませんよ」

スーデイリムは軽く笑って首を振った。

「さて？ 災い為す口を封じるために追放するも、ナスタウの血を一足早く絶やされるも、殿下のお望みのままに。」

ですが我が望みをお許しただけのならば、おそばにて殿下の統治の手足となりとうございます。剣と魔法には少しばかりの自負がございますれば」

そこで、ふと思い出したように続ける。

「ああ、ただ当面は女でも口説きますかな」

「——女？」

「好き者——と申しましたが」

スーデイリムは皮肉げに応えた。だがすぐに真顔になって言う。

「釣り合う器ではないと散々泣かれまして。私自身も妻を迎えられる状況でもありませんが、ただ人となった今なら聞く耳もあるでしょう」

「——もしか、イウレースのことで？」

問われて、スーデイリムは笑ってうなづく。

「もし後宮にとお望みなら、私を殺してお奪いになってください。こればかりは譲れませぬ。そしてイウレース自身にも、断らせませぬ。」

「——ところで、今日から幾日か休みを頂いても構いませぬか？」

「——」

リサルヴィアの王子はスーデイリムを見た。

重圧から解放された青年は、穏やかな表情で主の返答を待っていた。常に纏っていた隙のない張り詰めた気配は弱まり、今までの彼を見慣れていた魔術師にとってはいささか気が緩んでいるようにすら見える。

魔術師の頭が目まぐるしく働き始める。

そして彼の言葉を検討してから、リサルヴィアの王子は慎重な口調で、言った。

「……判りました。私には考える時間が必要です。とりあえず、あなたは戦の影響を調べるため、領土の視察に出られたということにいたしましょう。そうですね、二週間ほどでよろしいでしょうか」

「ありがとうございます」

スーデイリムは微笑んだ。

「御厚情、感謝いたします。もし御用がございましたら、名をお呼びください。」

我が名は殿下のものでございますれば」

言われて、魔術師は再びくらりと眩暈に襲われた。

「スーディリム」は長年彼の名だった。この上ないほど馴染み、自分のものとなっている。

——つまり、目の前の男の命運すべてを握っていることになる。なんと周到な罠だろうか。

スーディリムは優雅に一礼し、主君の前を辞して去って行った。リサルヴィアの王子は退室する彼の後ろ姿を見送りながら思った。

彼は思慮深く判断力に富み、慈悲深さと果敢さを兼ね備え、それに何より光輝があつた。

彼の自信に満ちた足取り、威厳溢れる優雅な所作——すべてを敬愛していた。

彼に仕えることに、誇りを感じていた。

——このようなことが赦されるはずがない。

魔術師は改めて苦い思いを噛み締める。

大臣や側近らに早急に知らせて即位せよと彼は勧めたが、このような話をすんなり納得する者がどれほどいるというのか。少なくとも自分には納得できない。

猶予は二週間。

時間がなかった。

その間にすべてを片付けねばならぬ。

魔術師は決意を胸に国王の亡骸に背を向け、部屋を後にした。

22・話がある(前書き)

R15描写あり

22・話がある

木戸を叩く音に扉を開きかけたイウレースは、背後の日の光を透かして輝く金色を見るか見ないかで素早く取っ手を引いた。

だがそれより速く靴先が隙間に捻じ込まれ、閉め損なった扉が引き開けられる。

掴んだ取っ手ごと前につんのめったイウレースの身体をしなやかな腕が抱き止め、やわらかな声が耳元で囁いた。

『イウレース』

途端に彼女の身体から力が抜ける。

娘を抱いた男はそのまま扉をくぐり、中に入って鍵をかけた。抱いた娘の額に軽く唇を触れ、近くの椅子に下ろして座らせる。

あの一夜以来、彼はこうして時折やって来るようになった。

毎回唐突に訪れるので、すっかり開けてしまつては同じことを繰り返して入り込まれてしまう。

イウレースは痺れる頭を振って彼の支配力から逃れた。

涼しげな美貌を恨みがましく見上げる。

「いい加減にしてください……」

判っている。

自分は彼に心を奪われているのだ。

だがそれは許されぬ。

なのに彼は彼女の意味を、こうして折ろうとする。

そしていつか挫けそうな脆い自分が、恐い。

「そうだな。いい加減にこういう真似は終わりにしたいものだ」

彼は卓を挟んだ反対側の椅子に腰掛けた。卓の上に肘をついて指を組み、娘を見る。

いつにない表情にイウレースは首を傾げた。

男はおもむろに言った。

「話がある」

「——というわけで、私はもう王子ではない。

正統な王太子殿下が近日中に国王として即位なされる」

イウレースは彼を凝視した。

彼の話のあまりの突拍子もなさ、理解が追いつかなかった。

スーデイルム——そもそも、この名は宮廷魔術師の名ではなかったか——は、静かに言った。

「それで、もう一度聞かせてもらおうか」

「……何を……？」

茫然と見返したイウレースの目を、この上なく真摯なまなざしが捕らえる。

「求婚を断られる謂れは、もはやなかるうはずだが？」
「――」

応えられぬイウレースに、スーディリムが立ち上がって歩み寄った。

両の掌が頭蓋を包み込み、娘の貌を上げさせる。

いかなる術の気配もなかったが、イウレースは動けなかった。

迫ってくる美貌とまなざしに射竦められ、ただ見返すことしかできぬ――。

否、目を奪われ、見惚れていたのだった。

刹那、彼がゆったりと微笑む。

「どのみち応えは一つしか許さぬがな」

重なる唇。長いくちづけ。

彼の威厳に圧倒され、イウレースは朦朧としながら思った。

――このかたが王でないなどということが、許されるのだろうか
……。

離れたスーディリムは娘をひょいと抱き上げた。

「あ……？」

我に返って目をしばたいたイウレースを見下ろして、またあの優雅極まりない笑みを浮かべる。

「別に応えを待ってからでなければならぬ、ということもあるまい？」

そう言つて、もの慣れた様子で奥の階段へと向かう。

二階にあるのは寢室だ。まるでもうこの塔の主のようだった。

イウレースはぎくりとして、必死に彼の胸にすがりついた。

「せめて、日が暮れてからにしてください——」

彼がやって来たのはイウレースが午後のお茶を飲み終えてもう一仕事、と思つていた頃合いだった。まだ日は高く、夕食の準備をするほどの時間にもなつていない。

しかし彼女が焦つたのは、常識を外れているだの恥ずかしいだのという理由ではなかった。

そんな綺麗ごとはどうでもいい。

今からでは、長過ぎる——。

スーデイルムは正しく理解して微笑んだ。

「明日からはな」

イウレースは情けない悲鳴をあげた。

スーデイルムはお構いなしに寢室まで辿り着き、娘を寢台に下ろす。

娘が寢台から転がり落ちるように逃れると、彼は涼しい声で命じた。

「動くな、『イウレース』」

途端に足腰が萎える。

くたくたと床に崩れた身体が、再び寝台に戻された。

「こんなの、ひどい……」

横に滑り込んできた彼にイウレースは訴えた。スーディリムは笑い飛ばす。

「自分で呪いに利用したくせに、使われるのは嫌なのか？」

ぐっと詰まった娘を抱き寄せ、腕の中にしっかりと閉じ込めて言う。

「嫌ならば取り戻すがいい。取り戻す方法は知っているのだろうか？
しかも私はもう名乗ったではないか。我が名を奪ってもいいのだぞ」

「……あ……」

「それをしないというのなら、遠慮はせぬ」

彼は宣言し、どこか酔ったような微笑みを浮かべて囁いた。

『イウレース』

ことさら力を込めて呼ぶのは、乱れさせようとしている証だ。

彼の気分を反映しているのか、その響きはどこまでも甘く切なく狂おしく——何より熔けてしまいそうなほどに熱かった。

頭の奥底まで冒すような言霊に圧倒され、イウレースの理性もまた痺れていく。

思考に霞がかかって何も考えられなくなり、羞恥と自制の箍が簡単に外されていく。

「やめ……て……」
「イウレース……」

弱々しい抗議も、なんの役にも立たなかった。
今宵の彼はいつにも増して貪欲だった。

陶然と嘔きながら、スーデイルムはその衝動と欲望のすべてを腕の中の娘に注ぎ込んでいく。

やがてとうとうイウレースが気絶してしまったときさえも、彼は許そうとしなかった。

「起きろ——『イウレース』」

極上の美酒を舌で転がすがごとくに唇にその名を乗せる。とろりとした甘やかな嘔きを娘に吹き込み、混濁した眠りの扉をこじ開けた。

かつてイウレースの意図によって傷を転嫁した呪いの言葉が、今はスーデイルムの意図に従って彼の持つ活力を分け与える。絡め取られた哀れな虜囚の目がゆっくりと開かれ、熱に潤んだ瞳が呪いの主を見返した。

彼は満足げに微笑み、次なる航海へと誘った。

イウレースにはもういかなる手段も残されていなかった。

何もかもが溶けていく。

だがすべてを溶かし尽くすまで、宴は続くのだ。

イウレースは彼の為すがまま、尽きることを知らぬ愉悦の混沌に埋もれていった——。

23・休暇

いつにも増してけだるい目覚めを迎えたイウレースは、よろよろと寢室を出た。

階下から漂ってくる食欲をそそる香りに誘われるように階段を降り始め――。

暖炉の前に金髪の人影を見て立ちすくむ。

「――」

「おお、早いな」

気配には人一倍敏いに違いないその人物が振り返って呑気に言った。暖炉を離れて階段を昇り、娘のもとへやってくる。

「まだ寝ていたほうがよいのではないか？」

「で、殿下……？」

「違うと言っただろう。スーディリムだ」

彼は訂正して、壁にすがって立つイウレースに手を差し伸べた。娘が立ち尽くしたまま動けないでいると、軽々と抱き上げて卓まで運ぶ。続けて椅子に座らせた彼女の前に、鍋からスープをよそって持ってきた。

根野菜と干し肉を煮たそれは、少なくとも彼女が作ったものではなかった。スーディリムは再び火に向かい、今度はパンを炙り始めた。

とてつもない光景だった。

イウレースは茫然と言った。

「お歸りにならなくてもよろしいのですか……？」

「今まで不休で頑張ったのだ。休みぐらい取っても文句は言われまい。それと敬語はやめろ」

やや焦げ気味のパンと自分用のスープを持って卓につき、彼は平然と言った。

「とりあえず二週間ほど世話になる」

「に、二週間……！？」

啞然として聞き返したイウレースに、スーデイルムはパンを齧りながらうなずいた。

「各地に視察に出たことになっている。あまり早く帰るわけにも行かぬだろう」

「でも、いくら役目を終えたからと言って、そんなに長く……」

「……真の王子殿下は突然真実を知らされて、いささか混乱しておられる。」

聡明な御方ゆえ腹を括られれば問題はあるまいが、今まで忠誠を誓う対象であつた私がそばにいては、考えるににくいこともあるう」

「――」

抗議しかけていたイウレースは、はっと口をつぐんだ。

淡淡とした口調に、彼の裡の計り知れぬ覚悟が透けて視えた。

黙り込んでしまったイウレースに、王子であつた男はやわらかく目を細める。娘の聡さと優しさがいとおしかった。話を変えるように、軽く言つ。

「無論ただで居候させるとは言わぬよ。肉体労働は無論、これでも魔術には通じた身ゆえ、助手程度の役にも立つ」

「そ、そんなつ……」

イウレースは焦って首を振った。

「何を言われるのです——」

「と言うより、私がいなくては何もできないのではないか？」

スーディリムは悪戯めいた笑みを見せる。

「その様子では、立ててもろくに歩けまい」
「——」

凶星をさされたイウレースは頬を朱に染めた。
だが原因となったのは、ほかならぬ彼ではないか——。
恨みがましくぶつぶつ言う。

「少し休めば、大丈夫です」
「無論休んでもらわねば。そのままでは夜に障る」

彼は平然とうなずいた。

イウレースは愕然と彼を見た。

「まさか……」

「安心しろ。昨日は特別だ。今日からはきちんと日が暮れてからにする」

「そんな——」

思わず椅子を蹴って立ち上がりかけるが、足腰に力が入らなかつ

た。ずるずると再び椅子に沈んだイウレースの様子に、彼は声をあげて笑う。

「早く慣れるのだな。確かに昨夜はいささか度が過ぎたが、あの半分程度はこれからも覚悟しておくがいい。それにどのみち私とお前が結ばれれば、生活の一部となるのだぞ」

彼の言うことは一から十まで滅茶苦茶だった。

ほんの一年前には思いもかけなかった状況に、イウレースは眩暈を覚えて首を振った。

「そんな……」

その時ふとスーデイルムは笑いを収め、真顔になってイウレースを見た。

「だが本当に、私はお前に覚悟してもらわねばならぬ。

お前が我が子を授かることはない。私にとってあの行為は、愛と愉悦を交わすものでしかないのだ」

「え……」

見返したイウレースに一つうなずいて、彼は淡々と事実を語った。替え玉が野心を抱かぬようにと、将来に渡って血筋を断つ処置が自身に施されていることを。

「……」

絶句したイウレースに、彼はいたずらめいた笑みを見せる。

「もしかするとそのせいなのかも知れぬな。私はああいった行為で

あまり疲れることはない。

お陰で“色を好む”という英雄の条件を満たす役にも立ち、替え玉として余計に都合はよかったわけだが」

「……」

イウレースは眉を寄せて胸元に手をやる。感じたのは、鈍くきつい痛みだった。

スーデイリムの言葉に自虐はなかった。彼にとっての事実をただ述べているに過ぎないのだ。続ける口調も穏やかで、むしろ娘を宥めるような響きを帯びていた。

「そんな顔をするな。英雄かどうかはともかく、私は好き者だ。行為に没頭している間は、確かに気分がいい。余計な心配をせずとも済んで、かえって都合がよいとも思っている。

ただお前には幾つかの幸せを諦めてもらわねばならぬことを、知っていてほしい」

イウレースはうつむく。

「私はあなたに相応しい器ではありません……」

「突然何を言い出す」

スーデイリムは戸惑いを浮かべて首を傾げた。

「話の内容が違うぞ。それに、私はもう王子ではないと言っただろう。家とてとうの昔に取り潰されている。

新たな陛下が格別に引き立ててくだされば、或いは將軍などということもあるが、それは高貴なる血とはなんの関係もないことだ」

イウレースはただ首を振った。

王家の血を引いていなくとも、それは彼の輝きにいささかの曇りを兆すものではない。彼はいと高き地位を預かって、私欲に疾ることなく臣下から信頼と崇敬を得ていたのだ。

その気高く勁い心が、むしろ余計に眩しかった。

今にして思えば、あの嵐の夜にスーデイルムが見せた凄まじい怒りの、真の理由が判る。

彼の負う傷の一つ一つは、彼の重責と苦悩そのものでもあったのだ。

それを、イウレースは事情も知らぬまま我が身に転嫁してしまった。彼は己の背負うべき業を、他人に押し付けてしまったように感じたことだろう。

ゆえに期せずして巻き込ませることとなったイウレースの軽率に、あれほどに激昂したのだ。

「……イウレース」

彼が席を立つて娘のもとに歩み寄った。のろのろと視線を移した娘の頬に掌を添える。

「駄目だ。応えは一つしか許さぬと言っただろう。私にはその部分に譲歩の余地がないのだ。」

私はお前に心奪われていることを自覚してしまった」

彼は娘の頬をいとおしむように撫でて言った。

「お前の聡さと勁い心が好ましい。お前の優しさと穏やかさが愛しい。お前が腕の中で悶えるのが嬉しい――。」

お前以外は何もいらぬが、お前だけは絶対に欲しい」

「――」

応えられぬイウレースに、彼は頭をそつと寄せて唇を重ねた。
離れたスーディリムは笑って言った。

「これ以上続けては、また欲情しそうだ。続きは今宵」

彼は卓に戻ってすっかり冷めたスープをすすり始める。ぼんやりしているイウレースに、手を振って食事するよう示した。

「食べないと力がつかんぞ」

「でも……」

イウレースは貌を歪めた。

「よせ。嫌だと言うならすぐに応える必要はない」

彼はきっぱりと娘を押し留めた。だが娘が唇を噛んでうつむいたのを見ると、口調を和らげて言い足した。

「まだ二週間あるのだ。その間に、せいぜい私を納得させられる理屈を見つけるがいい」

「あ……」

反応したイウレースに、彼は鮮やかに微笑む。

「ただ、今のところ私は決意を翻すつもりはない。
こちらで納得してもらうために力を尽くすゆえ、お互い努力しようではないか」

スーディリムはにこやかに言った。

「——それで？ 早速亭主として役に立つところを見せたいのだが。何か仕事はないか？」

すぐに薪割りでも始めかねない勢いだった。

話の始めから、彼が主導権を握っていることに変わりはないかった。

どうしたらよいのか判らぬまま、イウレースは情けない表情でスプーンを握り締めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0507z/>

王子と魔女のマスカレイド

2012年1月14日20時47分発行